

## Dol po pa の『宝性論釈善説陽光論』について (Ⅲ)

望月 海慧

## はじめに

本稿は、望月2008cに続くものであり、Dol po pa Shes rab rgyal mtshanによる *Ratnagotravibhāga* 注の和訳の後半部分であり、本論の第2章から第5章に相当する部分である<sup>1</sup>。各章の対応箇所は、まず「3. 2. 2. 2それぞれの性質」において示された残りの3項目である菩提の意味・功德の意味・行為の意味が第2章、第3章、第4章にあたり、第1章(1. 29)と同様に、それぞれの章のテーマが8義により解説される。最後の第5章については、「3. 2. 2出世間の清浄を得る方法の四住の支分の詳細な解説」の第3番目にあたり、他の4章とは異なる上位レベルにある。このように本論の章構成を並列的に扱っておらず、最初の第1章の一部と、最後の第5章は他の章と異なるニュアンスをもつものと分析されている。さらに第5章の第16偈以下については、「3. 3 円満な所作の完成」にあたり、本論のまとめと理解されている<sup>2</sup>。

注釈のスタイルは、前号に示したように、本偈に対して語を補足する形式であり、注釈者が本偈をどのように読んでいるのかを表示するものである。彼が本偈のそれぞれに対して、どのような意味をおいていたのかについては、彼のその他の注釈書においてどのようなコンテキストで引用しているのかを考察する必要がある<sup>3</sup>。これについては、別稿を要するので、本稿ではまず注釈書の和訳の残りの部分を掲載することにする。

## Dol po pa 著『宝性論釈善説陽光論』和訳 (承前)

## 第2章 菩提品

3. 2. 2. 2. 2. 今度は、その法界が究極の垢を離れてから諸仏世尊の無垢界におけるすべての場所を円満に変える結果に関してで、分別の自性に三つ。解説されるべき意味の区別をまとめて説いたものと、解説する在り方を集めて説いたものと、それらを合わせて詳しく解説したものである。

3. 2. 2. 2. 2. 1. そのうち意味の区別は、「円満に知られるべき事物の無垢真如の究極に至る結果の大菩提を完全に知るべき八種の意味から始めて解説をする。それも前に解説した法界の自性

清浄たるものは客塵の究極の垢から解脱してから二種の清浄をともなって存在することを完全にすることが菩提の性質と知るべきである。二種の清浄のその具足を得る方法である禪定の無分別たる出世間智と続けて得る世間智の二つが一体となることが原因の意味である。それらの知恵の修習が究極に至ってから煩惱と所知の障の習気をもつ究極の垢を離れることが結果の意味である。煩惱障を離れることで有漏のすべての衰えを超えて無漏の究極の財産を得ることで自利を円満に成立させ、所知障を離れることであらゆる場所で妨げるものなしに入る利他を円満に成立させることが業の意味である。それらの二義の円満を成立させる不可思議なる所依の無量の功德をもつことが具足の意味である。功德をともなうその菩提自身の底は量り難いので甚深なる法身であり、力などの多くの功德があるので広大な受用身であり、福分に従って利他をある者がなすので大我の化身であり、それらの三種により区別することが入る意味である。その三身も虚空に行く限りの時と等しいものに入りとどまることが常住の意味である。それらのありのままの在り方も仏とは異なる行境ではなく、考察し難いことが不可思議の意味である。そのように八種の意味により解説されるべきである」と言われる。[2. 1]

3. 2. 2. 2. 2. 集めたものは、「そのようならば自性清浄なる界の業所断の客塵の垢を離れた二種の浄化をもつことが性質の意味で、それを得る禪定と続けて得る道の領受が原因の意味で、道を修習してから二障の垢を離れたことが結果の意味で、障害を捨ててから自性の二義を成立させることが業の意味で、それらによる所依が不可思議の功德をともなう意味と、さらにまた自性と受用と変化の三身の区別による入の意味と、それらも有情と虚空がある限り常住の意味と、辺際に至る限りの在り方が普通の者たちによる不可思議な意味とであり、八種の意味により結果の辺際に至る仏地が設定されている」と言われる。[2. 2]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 詳しく解説したものに八つある。最初の二つは一緒に解説されているので、とりあえず七種の意味で、清浄を得た後の自性である原因の意味と、垢を離れた結果の意味と、自他の二義である業の意味と、その所依である功德をともなう意味と、三身の区別による入の意味と、存在の通りのものの常住の意味と、如実の不可思議の意味とである。

3. 2. 2. 2. 2. 3. 1 自性と原因の意味に二つ。浄化を得る在り方を簡略に説いたものと、その同じものを詳しく解説したものとである。

3. 2. 2. 2. 2. 3. 1. 1 そのうち簡略に説いたものは、「[心の本性は最初から光明である]と了義の教説から述べたそれ自身が太陽のように知られるべき真実を明らかに考察することで、虚空のように自性清浄の二つの捨をともっており、さらにまた前に衆生の位において客塵の垢の煩惱障と所知障の厚い雲の集まりに似た障害により覆われてから究極の真実の道による究極の垢は存在させずに捨てられ、仏の功德の力などを残らずに普く区別せずにともない、生と老と死から解脱するので常住で堅固で不滅の性質となる仏自身を得ることが二種の浄化をともなう性質の意味であり、その如くその菩提が諸菩薩の禪定における法性の如実の意味を把握して分別

しない知恵と後得に有法の如量の意味を把握して明らかに**区別する知恵に依って**から道を実践してから次第に**得る**であろうことが原因の意味である」と言われる。[2.3]

3.2.2.2.3.1.2 そのうち詳しい解説に二つ。二つの清浄をともなう自性の意味と、得る行為である知恵の原因の意味とである。

3.2.2.2.3.1.2.1 自性の意味に二つ。事物と殊勝とである。

3.2.2.2.3.1.2.1.1 そのうち事物は、「勝義の**仏性**は自性清浄の性質すべてに**無差別**に存在してから究極に客塵の垢も離れてから二種の浄化をともなう法により**区別**されるものであり、それも**太陽**が自性により光り輝き、**虚空**が自性により清浄であるように、**知恵**の光明の分別と二障の浄化の捨とで、捨と分別の二種の**円満の特徴**をもつものである」と言われる。[2.4]

3.2.2.2.3.1.2.1.2 殊勝に二つのうち、

3.2.2.2.3.1.2.1.2.1 自性光明の殊勝は、「**無垢界**であるその自性による**光明**の法身は因と縁により明らかに作られたものではなく、一切衆生の自性に**区別**することなく入ることをそなえているものでもある。それ自身ガンガーの川の水の中の塵の数も**超えた無量の仏**の功德である力などの**諸法**が普く始めより自然に成立してともなうものである」と言われる。[2.5]

3.2.2.2.3.1.2.1.2.2 客塵の垢を離れる殊勝は、「垢は**自性**により始めから**真実**としては成立しないからであり、不浄の一切の位に**遍満**するからであり、捨てるに相応しいので客塵のものであるから。三つの理由により解脱を妨げる**煩惱障**と一切智を妨げる**所知障**の二種がその衆生の位において雲による太陽と虚空の障害に似て自性光明を妨げると述べられるものであり、それらの障害を捨ててから二種の浄化をともなうことになる」と言われる。[2.6]

3.2.2.2.3.1.2.2 得る行為である知恵の原因の意味は、「**煩惱**と**所知障**の二つを離れることにより結果である解脱と法身を目の当たりにする**原因**は**如実**と**如量**を考察する二つの知恵を一体となって修習することである。それも菩薩の禪定において三界の対治である**無分別智**を修習することで主に**煩惱障**を捨て、その後得における甚深で広大な**所知の如量**の意味を区別する知恵を修習することで主に**所知障**を捨てるので、それらは**二智**であると認められ、それと関係する道が成立するよう努力すべきである」と言われる。[2.7]

3.2.2.2.3.2 垢を離れた結果の意味に二つ。無垢の喩例により簡略に説いたものと、原因の特徴を詳しく解説したものとである。

3.2.2.2.3.2.1 そのうち簡略に説いたものは、「例えば**懇願**の垢がなく、多くの水をともなう**次第**に**開花**した蓮華の花により遍満して覆われた美しい池のように**煩惱**である**食欲**から解脱し、**ラーフラ**の口の中から解放された**円満な満月**のように**瞋恚**から解脱し、**厚い雲**の集まりに似た**煩惱**である**痴**から解脱した理由により**日輪**の**光明**のように客塵の垢がなく捨てた**円満な考察**の究極の功德をもっている**ので如実と如量**を見られた**光の顕現**をともなう**完全なる仏**が**それ自身**である」と言われ、また「例えば蓮華の外皮から解放された**君主**である**ムニ**の**仏身**のよ

うなものが客塵の垢から解脱する勝者自身であり、そのように合わせて、蜂を離れた蜂蜜の如きと、殻から生じた麦の実の如きと、不浄なる泥を離れた黄金の宝と、地下にある宝の大蔵と、種子から育ち実をつけた樹木の如きと、汚れた衣を離れて無垢なる宝から成立した善逝の身体の如きと、そのように子宮から生まれた地主の転輪王の如きと、黒い泥土を離れた金像に似て究極の垢から解脱したものが対立する方向より勝った完全な仏自身である」と言われる。[2. 8-9]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2 詳しい解説に三つのうち、

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1 知恵に二身が生じる在り方は、「自性清浄なる法界は、水池を攪拌することにより清浄であり、などの言葉により月がラーフラから解放され、太陽が雲から解放されるように、美に対する貪欲と、などの言葉により不快なものへの瞋恚と中間に対する痴の客塵の垢による煩惱の三毒からも清浄になってから捨の円満をもつものが解脱身を得ることに多くの原因があり、まとめれば禪定の出世間の無分別智の修習自身により煩惱障を離れた結果を目の当たりにするであろうと明らかに述べられており、そのように円満なる考察の功德の所依である空性が光り輝く一切の相の最高をとまなう仏身を福分に従ってそれぞれの自証智の行境において確実に得るそのことが後得の世間智により甚深で広大な法を聞くなどの修習がなされることで所知障を離れた結果に目の当たりになっているとも説かれている」と言われる。[2. 10-11]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 2 三毒を捨てることで二義を成立させる在り方は、「自分の相続において三界への執着の貪欲の心を乱す塵のようなものを残らず捨てているからであり、他の多くの所化の相続である蓮華の花に説法により禪定三昧の水を注ぎ、止観により潤すからであり、二義の究極に至るその仏は清浄な水で満ちた沢山の蓮華により覆われた好ましい池と同じものであり、そのように合わせて、自分の好ましくない相続において普く悩まされる瞋恚の凶暴なラーフラのような障害から解放されることで他の相続において苦を離れるように望む大悲と、利益と結合することを望む大慈愛の光線に似たものにより所化の究極の有情に遍満するそれを把握するので、二義の究極に至るその仏は無垢の満月がラーフラから解放されるようなものであり、自分の相続を知らない痴の厚い雲の集まりに似た障害から解放されることで所化のそれらの中でも多くの有情の相続に従って法を説くことで知恵の光線により無知の究極の闇を取除いているので、二義の究極に至るその仏自身は無垢で光り輝く太陽が雲から解放されるようなものである」と言われる。[2. 12-14]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 3 垢を浄化することで心髓を得る在り方は、「他のいかなるものとも等しくなく、仏だけと等しい功德の法をとまなっているからであり、甚深なる正法の円満なる美味が所化の人に与えられるからであり、二障の習気をとまなう外皮を離れているからであり、究極に至るその仏が順序通りに蓮華から現れ出た善逝と蜂を離れた蜂蜜と、殻から出た麦の実のよ

うなものである。そのように合わせて、自性による垢がなく客塵の過失からも浄化されているからであり、功德の尽きることを知らない財産が所化の貧困と不自由の究極を取除くからであり、所化を苦から解放させる大楽の結果を与えるので、障害から解放されたその仏は、不浄による清浄な黄金と、地下から現れ出る大蔵と、結果をともなう樹木のようなものであり、願望が生じる宝のように無量の功德をもつ法身が目当たりになるからであり、所化の最高である二足の主で導く最高のもとなる受用身を得るからであり、宝の金から作られた像の相のように種々なる幻術の變化身を示すので、三身を完成するその仏は汚れた衣を離れた宝の身と子宮の腹を離れた転輪王と、泥土を離れた金像のようなものである」と言われる。[2. 15-17]

3. 2. 2. 2. 3. 3 自性の二義に二つ。二義を成立させる在り方を簡略に説いたものと、その同じものを詳しく解説したものとである。

3. 2. 2. 2. 3. 3. 1 そのうち簡略に説いたものは、「漏である習気をともなうことが僅かたりとも存在しない捨の究極に至ることと、所知の如実と如量の辺際に遍満する分別の究極に至り、捨と分別の円満をもつ勝義のその仏は永遠に滅することなく、無為の法をもつものである。不老による堅固と、無病による寂静と、不生による常住と、不死による不退処であるから。そのような悟りを得ることは、自利の究極をなし、それ自身が一切の白法の住処なので利他の究極をなしている。法性・真如の本性において如来の悟りは無為なる虚空により好機を開くことで色を見るなどの所作に入るように、福分をもつ聖なる人の六根は最高のものであり、それぞれに従う行道の対象を領受して考察する原因となすからである。それも次のように所化たちの最高の眼根により四大から転じて極微が集まったものではなく自在に仏の色の種々なる相の対象を見て、最高の耳根により常に無相で完全な正法のよい話を世間の法と混じらずに清浄な対象として聞き、最高の鼻根により善逝の戒の好ましい香りで決して過失の垢が付着しない清浄な対象を嗅ぎ、最高の舌根により偉大な聖者たちにより領受された正法の蜂蜜のような最高の味の対象を領受し、最高の身根によりとても清浄な三昧の地が生じる完全な触の無漏の大楽の対象を領受し、最高の意根により一切法の道理は始めから自性により甚深で考察し難い在り方の無我の対象を考察する特別な生の原因になっている。それも法性の種姓に依ってから微細に思惟して考察するならば、利他の辺際に至ることや勝義の無漏の大楽を領受する働きである。勝義の如来は無為の虚空のように生と滅と住などの有為の道理を離れており、変化がなく自然に成立するものではないから」と言われる。[2. 18-20]

3. 2. 2. 2. 3. 3. 2 詳しい解説に三つのうち、

3. 2. 2. 2. 3. 3. 2. 1 二義を成立させる在り方の区別をそなえたものを一般的に説いたものが、「多くの実践方法があってもまとめるならば、有学道において如実と如量を考察する二智が一体となって修習される行為においてこの二身を成立させることを知るべきである。それも禪定における如実な法性の対象に対する無分別智を修習してから客塵の垢から解脱身の捨の究極に

至ることが円満を得ることであり、後得において甚深で広大な法などの如量を考察する知恵を修習してから力などの功德の所依となる法身の考察の究極に至ることが垢の浄化であり、浄化されるままに無垢を目の当たりに得るであろう。そして障害から解脱する身と知恵の所依となる法身とがそれぞれ無漏と遍満の二相をそれぞれ有しており、共通に無為の一相を有している**と知るべきである**。このように解脱身は漏が僅かでも**存在しない捨**を有しているからであり、法身は所知の究極に遍満する考察を有しているからであり、両者は因縁により明らかに無為の自性を有しているからである。それらにより自利の円満が説かれており、それ自身が一切の白法の場所たるものであるから、利他の円満もなしている」と言われる。[2. 21-22]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 2. 2 自利の円満を特別に解説したものは、「客塵の煩惱が習気をともなって残らず根本から滅し捨てられるので解脱身は無漏の相をともなっている。そのように如実智は顛倒の漏による境への執着がなく、如量智は一切相を目の当たりにすることで境を妨げるものはないので、法身は知恵の考察による所知の辺際に遍満する相をもつものと認められ、どちらも永遠に滅も変化もない自性をともなっているから、因縁の明らかに無為なる相をともなっている。そして不滅自身が無為と簡略に説かれており、堅固などの言葉により寂靜と常住と不退処によるその不滅が詳しく解説されている。それも退く方向を把握してから解説するので有為の諸事物を滅の在り方の四相**と知るべきである**。堅固から退いて不堅固であり、などの言葉により寂靜より退いて不寂靜であり、常住から退いて無常であり、不退処から退いて退処が存在するからである。四とは何かと言えば、諸行が成熟して腐敗から朽ちる老と、界が**変化する**苦の病と、前世の相續を断じて後のものを成立させる生と、不可思議で種々なる相に**変化する**死との四種である。解脱と法身にはその四種の滅が**存在しない**ので、順序通りに不老により堅固で、無病により寂靜で、不生により常住で、不死により不退処であると知るべきである」と言われる。[2. 23-26ab]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 2. 3 利他の円満を特別に解説したものは、「そのように無垢の捨と所知の生起のそれらの考察は所化の福分に従う相續における白善法の特別な功德の生じる所依や根拠であるので、利他の円満の場所でもある。それも喩例のように生起させる原因ではなく、色などの特徴がない虚空は、眼根により色を見ることと、声と香と味と触と法が順序通りに聞くこととなどの声により、鼻が香りを受感し、舌による領受と、身による触と意による考察の分別の門から原因であると設定されるように、その意味のように二種の仏身を見ることに障害がなくなる加行の道を受けてから堅固な勝者の子の福分をもつ最高なる六根となる行境の対象を世俗における色身を見ることなどにより相と種好などの無漏の功德を生じる原因となし、勝義における法身を見るなどによる力と無畏などの究極の無漏の功德を目の当たりに生じる原因をなすものである」と言われる。[2. 26cd-28]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 4 その所依である功德をともなう意味に二つ。名称の異門を簡略に説いたものと、

理由を詳しく解説したものである。

3.2.2.2.3.4.1 そのうち簡略に説いたものは、「聞などによる不可思議と、不生による常住と、不老による堅固と、無病による寂靜と、不死による不滅と、無苦による極靜と、如量智による所知における遍滿と、如実智による離分別と、煩惱障の捨による虚空の如き無着と、所知障の捨による境と時のすべてにおける無碍と、自性清淨による善と、客塵の垢の淨化による無垢とであって、勝義の功德のその十五の異門が大菩提を得る仏性である」と言われる。[2.29]

3.2.2.2.3.4.2 詳しい解説に二つ。それらの功德が何らかのものをもとなう在り方と、ともなう功德が確定されることである。

3.2.2.2.3.4.2.1 そのうちともなう在り方は、「捨と考察の主体である解脱身と法身の二種により自利と利他の円満が成立すると説かれている。捨てられるべき究極の束縛から解脱することが自利を成立させ、考察の法身の功德に依存する所作により利他を成立させるからである。そのように自利と利他の両者を成立させる所依となるその二種の身には知恵による不可思議などの功德の十五法をもっていると知るべきである」と言われる。[2.30]

3.2.2.2.3.4.2.2 ともなう功德が確定されるべきものに二つ。甚深なる理由を詳細に解説したものと、後の原因を解説したものである。

3.2.2.2.3.4.2.2.1 甚深ものに三つのうち、

3.2.2.2.3.4.2.2.1.1 不可思議なる在り方を一般的に説いたものは、「法身を完成させたものであり、一切智智のみの行境となっており、勝義の仏は聞生などの三智の行境とはならないので、返際に至るその知恵の身は仏とは異なる身体をもつ者により「これである」と見るように不可思議なる功德をもっていると考察されるべきである」と言われる。[2.31]

3.2.2.2.3.4.2.2.1.2 特に詳しく説いたものは、「三智の行境ではない在り方はどのようなのかと言えば、勝義のその仏はとても大きいから微細で考察し難いので、聞生の智慧の行境とはならない。そのように勝義諦のそれぞれの自証知により考察されるものなので、思生の智慧の行境とはならず、法性・真如は甚深で底が量り難いので究竟であるので、世間の修生の智慧などの一切の智慧の行境となるのではない」と言われる。[2.32]

3.2.2.2.3.4.2.2.1.3 理由を喩例と合わせたものは、「そのようにその仏は普通の者たちにより考察し難い理由は何故かと考えるならば、色彩と形状などの種々なる色を生盲の者たちが以前に僅かでも見ることを領受しないように、凡夫の異生がその無垢真如を以前に僅かでも目の当たりに見ることを領受しておらず、生まれた直後の家にいる嬰兒は太陽の光線の姿を僅かに見ても完全なる悟りを見ることはできないように、勝者の子である第十地に住する聖者も法身を僅かに明らかに見ても、完全なる悟りを目の当たりに見ることはできないから」と言われる。[2.33]

3.2.2.2.3.4.2.2.2 後の理由に三つのうち、

3. 2. 2. 2. 2. 3. 4. 2. 2. 1 変化しない功德は、「その無垢の仏は始めより因縁より生じることを離れているので常の功德をともなっている。生が存在しないところには滅は存在しないので堅固な功德をともなっており、生と滅の両者による寂靜ではないことをなさないなのでその仏は寂靜の功德をともなっている。それ故に不滅の功德をともなっていて、法性である自性による涅槃は始めから存在し、変化しないものであるから」と言われる。[2. 34]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 4. 2. 2. 2 捨と考察の功德は、「その仏は一切の苦を明らかに滅する大楽の功德をともなっている。捨てられるべきものを残らず滅する滅諦の辺際が生起しているから。そのように所知の一切の相が目の当たりに考察されているので如量智の究極の所知に遍満する功德をともなうものであり、所縁と特徴にも存在することはないので如実智の無分別の功德をともなっており、それらの楽と考察の特殊性である。他者の解脱の障害である煩惱障の習気をもつことを捨てているので如実の対象に執着することのない功德と、一切智の障害である所知障をすべて残らず浄化するので如量の対象をあらゆる場所で妨げることのない功德と、沈み込みと昂りの二種などの入定の障害がないので心が柔和で三昧の行為に合っているので粗さの接触などを離れる功德をともなうものであり、それらが捨てる特殊性である」と言われる。[2. 35-36]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 4. 2. 2. 3 浄化の功德は、「勝義のその仏は極微の集合した色はなく有為の法を越えているので平凡な能力者により見られることがないことが力をもつことである。そのように因明などの特徴がなく、智慧の法から清浄であるから。平凡な智により把握されるものとして存在しない功德をともなっており、勝義の善の功德をともなうものである。法界の自性により清浄なものをともなっているからであり、とても無垢なる功德をともなっており客塵の垢の習気をもつものを残らずに捨ててから清浄であるから」と言われる。[2. 37]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5 三身の区別による入の意味に二つ。特徴の異門を簡略に説いたものと、その意味を詳しく解説したものとである。

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 1 簡略に説いたものに三つのうち、

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 1. 1 自性身は五つの特徴をともなっている。それも「最初の生と真中の住と最後の滅で、三種の有為の相は存在せず、明らかに無為の特徴と、無漏の法界と辺際の一切の智慧が一つに混ざることによる差別がない特徴と、有と無から解脱しているので増益と損減の二極に墮ちることのない特徴と、煩惱と所知の入定の三種の障害を離れた特徴と、煩惱の垢がなく分別の行境において作用がない法界の自性清浄なるもの自身を考察する時は常に法性に等しく至るヨーギンたる如来により目の当たりに見られる光明の特徴である。そのようにそれが五つの功德をともなうと知るべきである。本質が広大なので分別により量ることができない功德と、数により量を把握することができないガンガーの川の砂の数をも越えた功德と、論理の行境ではないので智により想像することがない功德と、他者と共通ではなく明らかな辺際に至ることにより等しいものがない功德であって、円満なる分別の功德をともない、如来のそのとて

も無垢の法界の生起は二種の障害である習気をともなう過失を残らずに捨てているので円満なる捨の功德をともなっている」と言われる。[2. 38-39]

3. 2. 2. 2. 3. 5. 1. 2 受用身も五つの特殊性をともなっている。それも「大乘の甚深で広大な種々なる正法の光の顕現を放つので言葉を述べることを中断させず、正法の光線や相と随好の究極の光線がある身により種々なる顕現が説かれることを中断させず、所化の有情の多くの最高の解脱のために解脱の意味を成立させることを努力する所作を中断させず、そのような所作も如意宝の王による願いを満たす如くである。分別と努力により明らかに行がなく自然に成立するものに入り、所化の想の能力により色と量などの種々なる事物を示してもその自性としては真実ではない特殊性をともなっている」と言われる。[2. 40]

3. 2. 2. 2. 3. 5. 1. 3 変化身は三法をともなっている。それも「世間の平凡な道に入る者たちは三有を厭ってから寂靜なる涅槃の道に入ることをなされ、解脱の道に入る者は甚深で広大な大乘を莊嚴してから明らかな成熟をなされ、大乘により明らかな成熟なる清浄の地を次第により莊嚴してから解脱を授記することをなされており、そのような円満なる所作の原因となって、所化の能力により種々に顕現する姿の変化身であるものも前の身体において尽きることのない法身が変化することのないこの界において輪廻する限り存在し常に中断することなく存在する。例えば無為の虚空界において有為の色界の生滅が中断しないように」と言われる。[2. 41]

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2 詳しい解説に三つ。共通な区別と、それぞれの設定と、それぞれの意味をまとめたものである。

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 1 そのうち区別は、「他の縁に頼らないので自ら生じる所知の一切智は知恵をともなっており、捨と分別の究竟の部分から仏性と呼ばれるものは輪廻と涅槃の二極にとどまらないので最高の涅槃であり、論理の行境を越えているので想として存在せず、輪廻の戦いに打ち勝つのでそれぞれの阿羅漢は自分で理解する自己となったその大菩提を区別するので、考察し難いことによる甚深なる功德と、威力をともなうので広大な功德と、福分に従うので大我の功德の三法により明らかに区別されるので順序通りに甚深は自性や本質の身で、などの語により広大な受用身と大我の変化身とで、三身により自他の利益が自然に成立し中断せずに入る」と言われる。[2. 42-43]

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2 設定に三つ。自性身の設定と、受用身の設定と、変化身の設定とである。

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 1 自性身の設定に二つ。特徴と功德を簡略に説いたものと、それらの本質を詳しく解説したものである。

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 1. 1 簡略に説いたものは、「そのように究竟の菩提を区別してから三身のその存在において諸仏の自他の円満なるその自性身は無為などの五種の相や特殊性をともない、功德がとても多くてもまとめれば無量などの五種の功德を区別なくともなうものと知るべきである」と言われる。[2. 44]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 1. 2 詳しい解説に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 1. 2. 1 特徴の詳しい解説は、「勝義のその自性身は有為法の生住滅により寂靜なので無為で変化がない特徴と、無漏の法界と究竟の知恵のすべてが一つに混ざるので無差別なる特徴と、世俗の本質として無であり勝義の本質として有なので増益と損減の二極が捨てられる特徴と、食欲などの煩惱障と煩惱がなくとも所知を知る妨げとなる所知障とその特に三昧に望むままに等しく至ることを知らない等至障の三つより確実に解放されている障害のない特徴と、煩惱の垢がなく分別の行境に区別なく、方便と智慧の一体関係に常に等しく入る究極のヨーギンのそれぞれの自証知の行境であるから、甚深なる法界は始めから自性清浄なので自性光明のその特別な五種をともなっている」と言われる。[2. 45-46]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 1. 2. 2 功德の詳しい解説は、「特相による無量の功德と、数による不可数の功德と、智による不可思議の功德と、他者とも等しくない功德と、浄化の究極に至る功德とが完全ならば、その自性身は無差別をともなうものである。それも自性は虚空のように広大で、「数はこれである」と完全に量ることはなく、一切の相における論理の行境ではなく、仏のみに存在する功德であり、二障の習気をもつものを残らず捨てているからである。それ故に無量などの功德を順序通りに広大などの五つの理由と合わせて知るべきである」と言われる。[2. 47-48]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 2 受用身に三つのうち、

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 2. 1 設定の詳しい解説は、「甚深で広大な種々なる大乘の法の修行を完成することを受用して存在するので説かれる教誡を述べることを中断せず、色身の自性の相と随好などの法をともなうものが福分をともなうものとして常に顕現するので身の顕現を示すことを中断せず、一切衆生を苦から解放させることを望む清浄なる大悲の原因に従う結果たる福分をともなう有情利益を中断させないので大悲による所作を中断せず、それらも分別と努力がなく自分でそのまま自然に成立する所化の望むままに望みを完全に満たすので行と基盤の色の力により種々なる如意宝として顕現してもその自性ではないように究極の所化の界と、想の信解の力により色と量などの種々なる神通が顕現してもその自性ではないと示すもので、そのように特に五種をともなう在り方により大乘の法を完成する受用身としてとどまるものである」と言われる。[2. 49-50]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 2. 2 さらにまたまとめて説いたものは、「そのように説く教誡を述べることが中断せず、身の顕現を示すことが中断せず、悲の所作をなすことが中断せず、それらを努力することで行は存在せず自然に成立し、福分の力により種々に顕現してもその自性ではないと示すこれらの五法を受用身と解説するこの機会に種々などの五種の特殊性が述べられている」と言われる。[2. 51]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 2. 3 特殊な縁から顕現する在り方は、「例えば大地の布の色彩が種々なる

色の縁により上の摩尼宝の種々なる色はその自体ではなくても美しさの力により種々に顕現するように、その意味のように所化の有情の界と想と信解などの種々なる縁の大悲により九生に遍満する自体の完全なる諸仏もその種々なる事物ではなくても色と量などの神変として顕現する」と言われる。[2. 52]

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 3 変化身に二つ。最高の変化身による十二の所作を示す在り方と、その区別から所化を次第により導く在り方とである。

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 3. 1 そのうち十二の所作を示す在り方は、「示すと言う後に出ているものを明らかにして合わせて解説されるべきである。それも如何なる原因を示すのかと言えば、究極の一切衆生に対して不可思議の大悲により把握されると認められる原因などを在り方のままに示す世間界をあらん限り知る知恵により所化となった世間の者を残らずすべてよく見てから如実に知る知恵が法身の無変化の性質を等しく設定してから決して動かない。いかなる意味を示すのかと言えば、変化の自性の種々なる相により稀に生じる十二の所作を正しく示している。それもシャーキャ族の王のように近くで説明するならば、その偉大な本人による兜卒天の生は「正しく白い頂」と言われ明らかに誕生する在り方を説いてからとても多くの天衆が成熟と解脱を莊嚴し、兜卒天の住処からジャンブドヴィーバに移られ、仏母の子宮に入れ、子宮から降生され、工芸の場所に熟達しており、後の衆会の中で別れて楽しまれており、后をとまなう宮殿から確実に出離されており、難行をなされており、菩提座である金剛の座に行かれており、魔の軍勢をとまなうものを慈愛の力により制圧されており、完全なる悟りとしては大菩提を得られており、法輪を三次第<sup>4</sup>として廻されており、完全なる涅槃に行かれている。いかなる場所を示すのかと言えば、完全に不浄の娑婆国土の世間界などの究極においてである。いかなる時に限るのかと言えば、所化が輪廻の存在が空にならずに存在する限り中断せずに自然に成立することを示している」と言われる。[2. 53-56]

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 3. 2 所化を次第により導く在り方に三つ。普通の者が劣乗に入る在り方と、劣乗に対する大乘による成熟の在り方と、大乘の解脱を修行する在り方とである。

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 3. 2. 1 そのうち劣乗に入る在り方は、「一切の所化は無常で、一切の有漏は苦で、一切法は無我で、涅槃は最も寂靜で楽であるなどの法の大集成を示す言葉により所化を教化する方便を知る諸仏により教化される衆生が輪廻への執着を三有による多くの罪過として説かれており、厭離を起こしてから最初に輪廻の過失を寂滅するだけで涅槃に声聞と独覚の道にも正しく入られている」と言われる。[2. 57]

3. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 3. 2. 2 大乘による成熟の在り方は、「自分自身の輪廻の苦を寂滅させる方便の声聞と独覚の道に正しく入ってから阿羅漢と自分の菩提を得て、辺際に至る位を得なくても涅槃を得ると思う想をもつ者には『妙法蓮華経』と『大般涅槃経』などに一切法の真実と空と悲を平行して示す大乘は一つだけであり、それにより行く涅槃も一つだけであると説かれて

いるものによりそれらの声聞と独覚は前に究極の涅槃を得ておらず、得ることへのその執着から退けて、方便である一切衆生が解脱することを望む大悲と智慧による一切法を空性と考察することに依ってから福德と智慧の二資糧を完全に把握することで三乗より最高となる大乘に成熟させて正しい道を莊嚴されている」と言われる。[2. 58-59c]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 2. 2. 3. 2. 3 解脱を修行する在り方は、「そのように大乘の道を次第により成熟させてから第八地などを得て、この国土である界は「これ」と言われ「この名称」と言われるものをともなうことでこの時だけが滅すれば、『劫はこれ』と言われるものにおいて成仏し、正法も「この有において存在するであろう」などと解脱の三菩提から最高の無上の法の王に授記なされている」と言われる。

それも国土と名称と時と劫の名称と衆会と正法も存在する門からそこに認められる。などと説かれているように。[2. 59d]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 3 まとめた意味に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 3. 1 理由と合わせて三つにまとめたものが、「微細で考察し難いので甚深であり、利他を成立させる力が円満なものをもたない、凡夫の異生の想の意味と力を示すことで輪廻から正しく導くので、これらの三身は数の通りに合わせて甚深な自性身と広大な受用身と大我の變化身と知るべきである」と言われる。[2. 60]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 5. 3. 2 存在する在り方と合わせて二つにまとめたものが、「仏身をつかむこの際に最初のその甚深な身が法身と知るべきである。一切法の自性であり、他の知の行境ではないから。後の受用身と變化身は色身である。福分と力を所化に顕現するから。それらも例えば無為の虚空界に有為の種々なる色が存在するように最初の法身の變化のない界には最後の種々なる色身としての顕現が存在するのである」と言われる。[2. 61]

3. 2. 2. 2. 2. 3. 6 存在の通りのものの常住の意味に二つ。常住な理由を簡略に説いたものと、その同じことを詳しく解説したものとである。

3. 2. 2. 2. 2. 3. 6. 1 そのうち簡略に説いたものは、「何に対しても執着なしに正法を把握するなどの究極の原因から成立する結果であるから、色身により利他をなすことが常に中断せずに、そのように合わせて、衆生を残らずに教化することを承知して、所化の衆生に漏がなく、利他を成立させる動機は一切衆生に対する大悲を中断させず、利他を成立させる方便の神変足を自在に得ており、輪廻と涅槃の自性は不二であると知ることで決して厭うことがなく、無漏の三味の円満な楽をともなうので苦により損なわれることがなく、一切法の自在者が世間に入ってもその過失が決して付着しないので色身により利他をなすことが常に中断せず、不死の位を得ることで死自体の魔を制圧しており、始めから無為なので有為の自性はないからであり、後の辺際に至る一切世間の守護者で救護者となるので、法身は變化がないので常住である。まとめれば十種の理由により如来のこの三身は常住なものである」と言われる。[2. 62]

3. 2. 2. 2. 3. 6. 2 詳しい解説に三つのうち、色身が常住なる理由と、法身が常住なる理由と、それらを一般的な意味にまとめたものである。

3. 2. 2. 2. 3. 6. 2. 1 そのうち色身が常住なる理由は、「前に有学道の場所において身体の頭などと命の相続と財産の宝石などの何れにも執着がなく、完全に捨ててから正法の保持などの究極の原因から成立するので、それらの色身は常に中断せず、そのように合わせて、衆生をあらん限りすべてに広大な利益を成立させるために、最初に衆生を残らずに輪廻から解放させるべきであると言う自身による誓願の意味の通りに辺際に至り、所化に漏がなく、完全な悟りを煩惱障により浄化し、清浄なる所知障の大悲が中断せずに究極の衆生に正しく入ることがあり、一つになったり多くに変化するなどの神変とその足の三昧において自在なことにより福分が等しい者に色身の顕現を示すことがその仏が輪廻している限りとどまって中断せずに修行でき、智の知恵が清浄なので存在の輪廻と寂靜の涅槃とを二種の自性として把握することから解脱した後不二と考察することで利他を厭うことを離れており、常時に不可思議で究極の無漏の三昧の円満な樂をともなっているので難行の苦により損なわれることはなく、利他のために世間に入ってそれらの福分に従って行じることが世間の法である煩惱と業と苦などが付着することがないので、色の自性の二種の身により衆生利益をなすことは常住で中断しないものである」と言われる。[2. 63-66ab]

3. 2. 2. 2. 3. 6. 2. 2 法身が常住なる理由は、「如来の法身が生起したそれは対治の辺際に至る門から変化せずに常住である。業と煩惱の死への変移はなく、生滅を残らず寂滅する最高の涅槃の場所の位を得ても死自身の魔は決して無因ではないから。そのように自性によっても常住である。因縁により明らかな無為の自性をもつ二の法身は最初から有為の一切の特徴を寂滅した自体をもつものであるから。欺かないので常住である。常に中断せずに守護者がいない衆生の守護と救護と保護などの辺際に適しているから」と言われる。[2. 66cd-67]

3. 2. 2. 2. 3. 6. 2. 3 それらの一般的意味をまとめたものは、「『究極の原因と』などと言う最初の七種の理由により色身の利他は常に中断しないものである。『死の魔を制圧し』などの後の三種の理由により示す仏の法身は変化がなく常住なものであると説かれている」と言われる。[2. 68]

3. 2. 2. 2. 3. 7 如実の不可思議の意味に二つ。不可思議なる在り方を簡略に説いたものと、理由を詳しく解説したものである。

3. 2. 2. 2. 3. 7. 1 そのうち簡略に説いたものは、「場所が残らず変化することで区別する無垢真如のその大菩提は言葉の所言説を越えており言語の行境ではなく、それぞれが自ら知るべき勝義諦は二つをともなうことによりまとめられ、分別により考察される場所や領域ではなく、推量する喩例と証因などのすべてを完全に越えており、出世間の明らかな辺際に至る無上であり、存在の輪廻と寂靜の涅槃に二極によりまとめられないので、勝者の完全なる悟りのみの一

切智の行境である聖者の大地にとどまる者たちもそのように不可思議ならば、普通の者が不可思議なのはなおさらである」と言われる。[2. 69]

3. 2. 2. 2. 3. 7. 2 詳しい解説に三つのうち、

3. 2. 2. 2. 3. 7. 2. 1 理由の相を順序どおり解説したものが、「三身を完全に完成したその菩提は仏とは別のものにより『こうである』と言うようには想像できない。言葉の領域ではなく、言葉により述べられないものであるから。そのように言葉により述べられないものである。勝義諦はそれぞれが自分で知るべきものであるから。それ自身が勝義諦である。分別により考察される領域や場所ではないから。それ自身分別により考察されるべきものではない。世間の喩例と証因などにより推論されるべきものではないから。それ自身推論されるべきものではない。出世間で無上であるから。それ自身無上である。存在の輪廻と寂靜の涅槃によりまとめられないから。それも存在と寂靜によりまとめられない。それらの二極にとどまることはないから。とどまらないものでもある。寂靜の極を功德と存在の自性を過失と考察することがないから」と言われる。[2. 70-71]

3. 2. 2. 2. 3. 7. 2. 2 二身に合わせてまとめたものが、「『言葉の領域ではないから』などと言う五つの理由によりとても微細で甚深で底を量り難いので法身を普通の者は『これである』と不可思議なる理由を示している。『存在と寂滅はまとめられないから』と言う第六の理由により存在と寂滅の法の生滅などの顕現もその事物として真実ではないので色身の究極の変化は不可思議である理由が説かれている」と言われる。[2. 72]

3. 2. 2. 2. 3. 7. 2. 3 功德から不可思議なる在り方は、「所知の如実と如量に意味をすべて目の当たりに考察することによる無上智の知恵と、一切衆生を輪廻の苦から解放させることを望むことによる究極の悲の大悲の所作の無量の功德により功德が究極の完成したものである。勝者が大菩提を得るこのことは仏以外の者によっても如実に不可思議である。それ故に他者に依存せずに自分で修習してから生じた諸仏も八種の設定の最後の不可思議な在り方や、また初発心などに依ってから明らかな完全なる菩提のこの在り方は、仙人である偉大な菩薩たちの地に存在し、十根を得ることによっても目の当たりに知らなければ普通の者はなおさらのことであり、知ろうとする者たちは悟りを得る」と言われる。[2. 73]

【大乘最上秘乗論】の「菩提の位」の第二章の解説をした。

### 第3章 功德品

3. 2. 2. 2. 3 今度は大菩提にとどまる者に存在する関係と異熟の結果によりまとめた特別な功德に関して、考察の支分である功德の意味に二つ。二身と合わせた数の区別と、区別される功德の設定とである。

3. 2. 2. 2. 3. 1 区別に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 3. 1. 1 身と功德を区別して説いたものが、「仏と言うものも自利の円満と利他の円満に至ることにより区別されており、さらにまた所依である自利の勝義の法身と、それに依存する利他の世俗の色身自身であって、二身の自体をともなうものであり、それらを有に依存する功德を区別すれば、法身における有を離れる結果の三十二の功德と、色身における有を異熟した結果の三十二の功德であって、両者をまとめてから功德の区別はこれらの六十四である」と述べられている。[3. 1]

3. 2. 2. 2. 3. 1. 2 それらをそれぞれ結びつけることが、「一切の自体の利益の円満と成就である国土が自然に成立する場所や基盤が聖者の知恵である正しい行境の対象としての法身が明らかになったものであり、偉大な仙人でもある完全なる諸仏の種々なる標識のみとして示される身は完成した所化の円満なる一切の利益を生じ自然に成立させる場所や基盤であり、それらから最初に成立する法身が十力と四無畏などの知恵の集まりを集めてから障害を離れるだけで区別される諸功德と区別されないものをもとなっており、二番目の色身は偉大な人の三十二相などの福德の集まりを集めてから次第に成熟する功德もともなうものである」と言われる。[3. 2-3]

3. 2. 2. 2. 3. 2 区別される功德に四つ。喩例の意味と合わせて簡略に説いたものと、それぞれの設定の詳細な解説と、それらを説く聖典から考察する在り方と、再び喩例の意味をまとめて説いたものである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 1 そのうち簡略に説いたものは、「勝者の十力自身により無明などの障害を克服することに対して障害により破壊されないので実体の事物である金剛が他の事物を制圧し、その他のものにより破壊されないようなものあり、四無畏により輪廻の究極の集まりの中で畏怖と恐怖がなく法を説くので獅子は獲物の中では畏怖がないようなものであり、如来の十八不共法は他者と共通ではないので虚空が四大と共通ではないようなものであり、ムニの所化たちに相と随好により飾られたものを示した変化身と受用身の二つは福分によりさまざまに現れても、それらの自性として成立することはないので、水と虚空に出現する月のようなものである」と言われる。[3. 4]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2 詳細な解説に二つ。自利である勝義の法身における有を離れた結果の功德の詳細な解説と、利他である世俗の色身における有の異熟の結果の功德の詳細な解説とである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1 離れた結果の功德に三つ。勝者の十力の解説と、四無畏の解説と、十八不共法の解説とである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 1 十力に二つ。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 1. 1 示される意味の自性を認識することは、「前に有学の位において大乘の法への誓願を示すことをなしてから『究極の法身を悟れば自ら生じる二種と転輪王が生まれる所依から生じる場所であるが、女性の所依から生じる場所ではない』といわれるように因果で

ある有と無の一切の在り方が妨げなしに目の当たりに考察される場所と場所ではないものを知る力と、そのように前も業である因果の法に対する意を堅固にしてから、「不善業から望まれない意熟が生じ善業から望まれる異熟が生じる」と言われるように因果のそれぞれの確実な一切の相を妨げなく目の当たりに考察される諸業の異熟を知る力と、前にも所化の能力を考察してからそれに応じて法を示してから衆生の信などの鋭い能力と中程のものと鈍いものとの区別をすべて妨げなしに目の当たりに考察して最高の能力と最高ではないものを知る力と、前にも「所化の界に応じて入ってから諸衆生は位における三乗の異なる種姓に住する」と言われるように種姓や界の差異を妨げなく目の当たりに考察して種々なる界を知る力と、そのように前にも所化の信解に応じて法を説いてから「これらの衆生は三乗のうちこれを信解する」と言うように信解の種々なる想の一切の区別を妨げなく目の当たりに考察して種々なる信解を知る力と、さらにまたすべての乗を修習することをなしてから三界と三菩提などの輪廻と涅槃のすべてにおける有情の道のすべての区別を妨げなく目の当たりに考察して一切処に行く道を知る力と、前にも究極の三昧を自然に受けてから他の人たちの相續に生じる禪定と無色と解脱と三昧と等至の有漏の雑染と無漏の清浄の一切の差異を妨げなく目の当たりに考察して禪定などの煩惱をとまなうものと無垢とを知る力と、前にも善根を無駄にせずに放逸をなさないでから、自他の前世の一切の行の原因をとまなうて妨げなく目の当たりに知り前世の場所を記憶している力と、前にも他者の勇気を萎えさせず、それらが現れるようにすることで対象の通りに法を説いてから衆生たちがどこから死に、どこで生まれるのかの在り方である存在する間の善悪の一切の区別を妨げなく目の当たりに知る天眼の神通の力と、前にも漏が尽きるために法を説いてから自他の煩惱が滅し、漏が尽きる一切の相において妨げなく目の当たりに考察して寂靜を知る力とであり、そのようならばそれぞれの相續と随順する捨てられるべきものよりも勝った力が十種の目の当たりになる自他の異なる方向の四魔を制圧することをなされている」と言われる。[3.5-6]

3.2.2.2.3.2.2.1.1.2 示される喩例により確実にされるものが、「因果の場所と場所ではないものを知る力と、業と異熟を我所とする力と、所化の種々なる界や種姓を知る力と、行道の種々なる区別を知る力と、衆生の種々なる信解や想を知る力と、所化の信などの能力の集まりの最高のものと最高ではないものを知る力と、禪定と等至などの煩惱をもつものと清浄なものとの差異を知る力と、前世の住所を記憶する神通の力と、天眼による死と生を知る力と、自他の漏が尽きる在り方を知る力とがそれぞれの対立する方向の無知などの障害の強い鎧と堅い壁と厚い森に似たものを、順序通りに穴をあけ、滅し、断じるからであり、勝者の十力であるものが実体の事物の金剛のようなものである」と言われる。それも解説されるように「場所と場所ではないものを知るなどの最初の六つの力により所知障の強い鎧に似たものに穴をあけるので金剛と同じで、禪定などを知ることと前世の場所を記憶することと天眼の神通の三種の力によ

り等至の障害の堅い壁に似たものを滅するので金剛と同じであり、漏が尽きることを知る一つの力により煩惱の障害である厚い森に似たものを断じるので金剛と同じである」と言われる。

[3. 7]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2 四無畏に二つ。意味の本質を認識することと、喩例により確定すべきことである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 1 意味に二つ。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 1. 1 本質は、「前にも等しい心の門からもの惜しむことなく法を説いてから、自利より始めて如実と如理の智の法を残らずすべて目の当たりに考察する在り方により自分自身が完全に悟ると言う約束に対する無畏と、前にも中断する法に依存することなく利他から始めて解脱を得ることの障害の貪欲などの煩惱を滅しなければならないと言う一切の中断する法に対する無畏と、前にも白法に対する信解を浄化する道に入ってから利他より始めて輪廻を確実に出る三乗のすべての道を示すことに対する無畏と、前にも我慢なく法を説いてから自利より始めて捨てられるものを残らず尽くす滅を得る<sup>5</sup>とと言う約束に対する無畏とであって、そのように四種の意味から始めてから偉大な君主の住処において誓願し、衆会の中で獅子の声を発し、梵行者の住処において法輪を廻して苦行者と種姓と受用と効力と執着を離れることで我慢の沙門とバラモンと天と魔と梵行者などの誰もが法に従う門から争うことや争う特徴を完全に見ることはなく、身体を楽しむことと言葉を恐れることがなく、畏れない心を得るので、諸仏の無畏の功德は四種である」と言われる。[3. 8]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 1. 2 所作の行為は、「四無畏を得たものに依ってから自分自身と他者の利益から始めて、知られるべきものである苦などのすべての相を自分で知ると言う約束と、他者も知るべきために所知である苦などの一切の法を示すことをなされているからであり、捨てられるべきものの業と煩惱などの集を自分自身で捨てるという約束と、他者も捨てるために断じられる集の一切法を示すことをなされているからであり、依存されるべき道諦の一切法に自分で依存するという約束と、他者も依存するために確実に生じる道の一切法を示すことをなされているからであり、得られるべき無上でもとも無垢なる滅諦の二つをともなうことを自分で得ると言う約束と、他者も得るために漏が尽きる滅の法を示すことをなされているからである。そのようなならば自分自身のよい考察を約束することと、他者もそのようななすために四聖諦を説くことには決して畏怖がないからである。大仙たる完全な悟りを得た者は沙門とバラモンなどの輪のどこであっても正法を説くことに妨げなく入って行く」と言われる。[3. 9]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 2 喩例により確定すべきことは、「畜生の主である獅子が深い森の辺際に常に住んでいても畏れはなく、虎と象などの大きな力をもつ畜生を恐れることなく歩き回る際に、自分自身は上手く住んでおり、他者に頼ることなく、知恵が堅固で、円満な技をもっているように、そのように沙門とバラモンなどの多くの我慢をもつ者が過去に集まったムニの主で

ある人の獅子も畏れと恐怖がなく、自分が最高になることで上手く住み、他者が堅固であり、とても細かい捨てられるべきものも捨てることで円満な技量をもって住する」と言われる。[3. 10]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 不共法に二つ。対象である事物を説いたものと、喩例と合わせたものとである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 1 対象である事物を説いたものに二つ。十八不共法のそれぞれの区別と、さらにまたその解説をなす行為と得る在り方とである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 1. 1 区別に二つ。区別して詳細に解説したものと、まとめて他のものも説いたものとである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 1. 1. 1 詳細な解説に四部のうち、

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 1. 1. 1. 1 行によりまとめた六つは、「仏の身体と言葉と心の行に退くことはない」と示している。それも前の有学道の位において道に迷った衆生に誤りのない道を示すなどの修習をなすことで最後に悟るならば、跳んだり走ったりなどの三毒による普く受領される迷乱はなく、共通ではない身体の行の一つと、前の努力なく自然に受領され、嘘の言葉と妄言を言うなどのことを捨ててから論争と冗談などの煩惱から受領される騒がしい音はなく、共通ではない意の行の一つと、前の六念を修習してから示す仏には過去の目的を忘れる記憶を損なうことがなく、前の他者の心を守るなどの修行をなしてから三昧において一点にとどまり、後得錯乱などの等しく設定されない心はなく、前の顛倒した心と想を捨てるなどの修習をなしてから輪廻と涅槃を異なる自性と把握する種々なる想もなく、前の自他を平等にすることと有と滅を平等にすることなどを修習してから、所化が時に至ってもそれぞれを考察されない門から消失の捨はなく、心の不共なる行は四種である」と言われる。[3. 11-12a]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 1. 1. 1. 2 考察によりまとめた六つは、「如来の能力があり、結果をともなってから得ることのない損害が存在しないことを示して、それも以前の甚深で広大な法を求めるなどの修習をなしてから宝の血統を断じず、衆生利益を求める願いを損なうことがなく、前の師に依存し、衆生を成熟させるなどの精進を修習してから利他を広げる精進を損なうことがなく、前の記憶を近くにおくことなどを修習してから一切法を如実に見る記憶を損なうことがなく、前の法を求めることで満足せずに三智を起すことで法を区別する智慧を損なうことなく、以前の喧騒を捨てて静かな場所でヨーガと解脱などを修習してから障害を離れた解脱を損なうことがなく、前の他者により考察されるために法を説いて縁起生の理趣の知などを修習してから一切智を見ることを損なうことがない。ここで三昧が説かれないことは常に不等至がない中にまとめられ、ある者の場合は念を説かなくても忘れることがないことにまとめたり、ある者は、一切有部のようなならば、願いと精進を一つにしたり、また解脱と解脱智を一つとなすものである」と言われる。[3. 12b-d]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 1. 1. 1. 3 所作によりまとめた三つは、「不共なる働きをなされており、それも前の詐欺と偽りなどを離れた梵行を修習してから、身業の変幻などのすべてに知恵が先行し、知恵が随行し、以前の虚妄を言うことなどを捨て、利益と適当と法とをともなって言うことを修習して身と口の業の説法などのすべてが知恵に先行し、知恵が随行し、前に貪心などをすべて捨てて正見などを修習してから意業の三昧の修習などがすべて知恵に先行し、知恵が随行するので、身口意の三種の働きも知恵に先行し知恵が随行するものである」と言われる。

[3. 13a]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 1. 1. 1. 4 智によりまとめた三つは、「知恵における住処は不共なるものであって、それも過去と未来と現在の諸仏による執着と妨げがない知恵に頼り疑惑を食べることなく自分自身もそれを得ることを信解し、自他もそのようなものに入る修習をなしてから、順序通りに過去時において執着せず妨げない知見に入り、未来時において執着せず妨げない知見に入り、現在時において執着せず妨げない知見に入るので、三時に入る知恵は執着と妨げる障害との二つがない」と言われる。[3. 13b]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 1. 1. 2 まとめた三つは、「そのようならば行によりまとめた六つと、分別よりまとめた六つと、所作よりまとめた三つと、智よりまとめた三つのこれらの十八と、さらにまた無量の身体と、一切を制圧して特別な聖者の頭のように明らかでなく、果汁の薬に似ていると見た直後に衆生の過失を減するなどの浄化を示すのは仏のみなので、他の人と混ざらない不共なる功德である」と言われる。[3. 13cd]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 1. 2 さらにまたその解説をなす行為と得る在り方は、「身体の行に迷乱がなく、口の行に騒がしい声がなく、意の行に忘失の記憶を損なわず、記憶を損なうことはなく、意が動く不等至はなく、輪廻と涅槃は自性が異なると把握することなどによる種々なる想はなく、所化を考察することなく自分の本性から捨を設定することが大仙たる仏にはない。行によりまとめた六功德と、他者の利益を求めるとの願いを損なうことがなく、そのように利他を広げる精進を損なうことがなく、一切の対象を見る記憶の浄化を損なうことなく、煩惱の垢のない智慧を損なうことがなく、常時に障害から解脱することを損なうことなく、所知の如実と如量の対象をすべて残らず目の当たりに見る解脱智から決して損なうことがない。考察によりまとめた六種の功德と、何れかの仏の身口意の三種の働きのすべても、最初に知恵が先行し、後に知恵が随行してなされるので、まとめられた三種の功德と、過去と未来と現在の三時によりまとめられた所知には常に執着と妨げがないと確定した広大な知恵に入ることを知ることでもまとめられる三種の功德である。そのように仏の混ざることのない十八の法の何れかを考察し明らかにすることに依ってから所化の有情はとも多くのものに対する畏れと恐怖がないので広大な正法の輪を廻されて、彼は一切衆生を苦から解放させることを願う大悲をもち、四魔より勝れた唯一人の師であり、また諸仏により前にそれぞれと後のものに応じた道を修習

し客塵の垢を離れてから目の当たりに獲得される」と言われる。[3. 14—15]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 1. 2. 3. 2 喩例と合わせたものは、「地などの四大に存在する法である地の相の堅さと、水の相の湿性と、火の相の暖かさと、風の特徴の揺れることなどの有為の法性は無為の虚空の相ではなく、虚空の相である障害がなく妨げがないことと無為などの功德の相であるものも四大の色にはないのでお互いに混ざらないように、他の人にも存在する法の生滅などは仏には存在せず、仏の究極の功德は他に人には生起することがないので混ざらない功德が虚空と同じであり、また喩例からも特別に勝れたもので、地と水と火と風と虚空の界は大だけなどが同じであるので、世間において共通なものも存在して、仏の不共なる法でさえ極微ほども世間のものとは共通にはならないので虚空によってもその通りに示すことはできない」と言われる。[3. 16]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 2 異熟果の功德の詳細な解説に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 2. 1 示される相の区別を解説したものが、「前の有学の時に堅固な誓願をなしてから、究極の色身を悟られた際に御足のひらで安住し、亀の腹のように平らなものであり、そのように前に種々なる資具を布施してから御手と御足のひらに輪の絵の千の骨格をもつことによる相と、前に他の者たちが特に不殺生から御足の踵が広く、御足の踝は露出せずに加護により球状であり、前に衆生を法により護ってから御手と御足の指は長く、前に他の衆会を区別しないで御手と御足の指は金の網により結ばれており、前に種々なるよい衣を与えられてから皮膚がとても柔軟で若々しい身体をもって生存するのでよいものであり、前に最も最勝の食べ物と飲み物を布施してから身体は両足の裏側と両手の後ろと両肩の上と首の後ろの七箇所に隆起があり、知恵を広く満たしており、前にも仏法を完全に把握してからふくらはぎは畜生のエネーヤーに似て丸くて歩くと次第に細くなるもので、前の秘密の言葉を護り性交を捨ててから秘密の場所は象や馬のものを知るように内部に隠れたものであり、前の広大で究極の善業により行じてから上半身は獅子に似て広がっており、前に善法を正しく行じてから両肩の腋には空きはなく肉が広がっており、前に他者を畏れずに布施をして息を吐いてから肩先が上手く丸く肩全体が美しく、前に他者の友人がなすことを広げることで入ってから両手は触るところが柔らかで丸い形で、太かったり細かったり高低がなく、尊敬されなくても御手のひらが膝頭に着くので御手が長くて、前に十善に満足することなく行じてから垢が浄化された身体は光輪をもっており、前に病気の者たちに種々なる薬を与えてから首は無垢なる三枚の貝殻の絵と同じものであり、前に善なるヨーガを完全に完成してから顎は畜生の王である獅子に似て広がっており、前に一切衆生に対して心を等しくしてから歯はちょうど四十本であり、上下二十二十数が同じであり、前に親しい人を調停してからとてもきれいで隙間のない歯はよく密なるものであり、前に好ましい宝石を与えてから無垢で清浄なる歯は長短と太かったり細かったりすることがないので平らで、前の三門の一切の業の罪過の垢が付着することなく行じてから犬歯が最

勝の貝殻のように白いもので、前に一切所において真実の言葉を護ってから舌は長くて細いので御口の周囲を覆うものであり、前に好ましい味を布施してから美味ではないものも限りや量がなく、他者が想像することも無い最高の味を知っており、前に悪い言葉を捨てて名声を述べてから考察の動機に依ることなく自ら生じる御言葉であるカラビンカ音と梵音のように聞こえ遠くでも聞こえ、前に慈愛の門から他者を守護してから眼のよさは蓮華の葉のように白黒を区別し長いものであり、前に心を揺らす原因を無にしてから睫毛は最高の牛の睫毛に似て厚くて黒いが剛毛ではなく、前に賞讃に値する者を賞賛してから御顔の廻りが美しく無垢の眉間に白毫を引っ張れば腕まで長く、置けば右方向に巻かれて存在するものをもなっており、前に師を尊敬し礼拝してから肉髻を真中の頂上に有して一切衆生により見られることは現れず、前に心が業に適切なものをなして好ましい臥具の敷物を布施してから無垢による清浄と縮まらないので繊細な皮膚は金色に似て衆生の最高である仏にあるもので、前に喧騒を捨てることで善を広げて賢者と軌範師などの教説に従って把握してから毛は微妙で柔らかくそれぞれから生じて身の上に右方向に巻かれており、前に打つものや武器などを捨ててから毛髪は無垢な宝の碧玉のように存在し、前に自他のすべてが三昧を修行してから身体がニヨグロードの完全な幹の木の輪のように面積が隠れており、前に如来の身体の像と塔の壊れたものを直し、畏れている衆生が息を吐いてから普く美妙で無比の大仙たる仏がナーラーヤナの力のようなものがあり、金剛のように堅固な大きな身体で導いて全体に美しいものである。そのようなならば凡夫たちにより不思議で威厳のある吉祥なる焰のこれらの三十二の功德は天と人の師で一切智者で人の自在なる偉大な人の善妙なる特徴の功德として經典に明らかに説かれており、それらがここでも語られている」と言われる。[3. 17-25]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 2. 2 示す喩例と合わせてまとめたものが、「喩例の通りならば、雲のない時の秋の月の円満な姿が虚空の輪に見え、秋の時の青いきれいで汚れのない水の湖に見えるように、その意味のように勝者の十人の子と普通の弟子の集まりにより満ちた主たる仏の受用身と変化身との二つの姿が順序通りに完全な仏の輪と世間の輪の中に見えるであろう」と言われ、「例えば菩薩が見る受用身は虚空の月に似て、普通の人が見る変化身は水の中の月に似ている」と言われる。(3. 26)

3. 2. 2. 2. 3. 2. 3 聖典から考察する在り方は、「そのように如来の十力と、四無畏と、仏の十八不共法と、偉大な人の三十二相とで、仏のこれらの六十四の功德はそれぞれにそれぞれであり、法身に存在する功德は垢を離れさせる原因をもっており、色身に存在する功德は次第に生起させる原因をともなっており、ここに説かれた数と順序の通りに『宝女経』に従ってからそのように知るべきである」と言われている。[3. 27]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4 再び説いたものに二つ。喩例の意味に従う理由を一般的に説いたものと、それらを合わせてそれぞれ解説したものとである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 1 そのうち一般的に説いたものは、「如来の十力はそれぞれに従わない方向により**不壊**なので金剛と同じであり、四無畏は自身が**氣弱**ではないので獅子と同じであり、十八不共は煩惱などと同じものはなく**共通**ではないので虚空と同じであり、妙相をともなう二種の身体は、法身が虚空に似たものから動くことがないように所化に顕現するので月と同じであるから、四項目の功德が順序通りに実体のものの**金剛**の喩例と、畜生の主である**獅子**の喩例と、無為の**虚空**の喩例と、**清浄な水**の中に出現する**月の喩例**により説かれている」と言われる。[3. 28]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2 それぞれを解説したものに二つ。離れた結果である法身の功德を解説したものと、異熟の結果である色身の功德を解説したものである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1 離れた結果に二つ。区別して喩例により表す在り方と、まとめて区別しない在り方とである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1. 1 示す在り方に三つ。諸力を金剛により表す在り方と、無畏を獅子により表す在り方と、不共法を虚空により表す在り方とである。

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1. 1. 1 力による特徴のあり方に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1. 1. 1. 1 それぞれの特徴の在り方は、「場所と場所ではないものを知る力などの十力から最初の六力と中間の三と最後の一とにより順序通りに所知の障害と等持の障害と習気をともなう障害をすべてから取り除くので金剛に似たものである。三種の障害の甲冑と壁と樹木のように存在してから力により順序通りに貫通し破壊し切断するから」と言われる。[3. 29-30ab]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1. 1. 1. 2 共通な特徴のあり方は、「重いことと、堅いことと、堅固で不壊であって、功德による四法をともなっているので、大仙たる完全なる仏の十力のすべては金剛に似たものである。それも如何なる理由のために重いのかと言えば、輪廻と涅槃の一切法の核心であるから。何故に堅いのかと言えば、無為で自然に成立するので堅固であるから。何故に堅固であるのかと言えば、分別と相などの従わない方向のすべてにより破壊されないから。そのようにまた一切の捨てられるべきものは制圧され、捨てられるべきものはさらにまた不壊なので、十力は実体の事物である**金剛の如く**である」と言われる。[3. 30cd-31]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1. 1. 2 四無畏の在り方に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1. 1. 2. 1 説いたものは、「誰にも**畏れ**がないから、他者に対する執心が**ない**から、知恵の力は明らかに堅固であるから、従わない方向を制圧することに**円満**ある**勇猛**をともなっているからである。そのように功德の四法をもつのでムニの自在は人の獅子であることは、獅子は四法をもつので畜生の中で畏れがないように衆会の集まりの限界の中で畏れと恐怖なしに存在している」と言われる。[3. 32]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1. 1. 2. 2 解説したものは、「そのように四法をともなっても何により知るの

かと考えるならば、所知のすべての相を残らずに明らかに知るので一切の間に答えを説くことができるので異論者などの何れかの人にも畏れがなく善住の功德をともなうものである。そのように何らかの障害を種姓により浄化する衆生・声聞・阿羅漢と十地に住する菩薩とも自分自身は等しくなく彼らを越えていると見るので他の誰に対しても執着がない功德をもっており、御心は如実と如量の一切法を考察せず一点にとどまるので三昧より堅固なので功德をともなうものであり、最も捨て難いので無明の習気の地のとても微塵な障害からも上手く超出しているので対立する方向を制圧することに勇猛な円満の功德をともなうものである」と言われる。[3. 33-34]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1. 1. 3 不共法の特徴の在り方は、「世間の我に執着する凡夫と、人無我を考察する声聞と、人と法の半分を取った無我を考察する一辺行者の独覚と、人と法の二無我を考察する知恵のある菩薩と、究極の所知を目の当たりに知る自ら生じる完全なる仏が上から上に知恵が微妙で甚深で最高になるからであり、それらの順序を示す喩例は地と水と火と風と虚空である。五種の大は前の前より後の後は微妙で甚深なる法と同じであり、また仏の功德は世間を残らずすべて利益する最高の基盤となるから、地により所依となし、水により集め、火により成熟させ、風により腐らないようにさせるので世間の利益をなすことと同じであり、また仏に明らかに成立する諸法は世間の異生と出世間の声聞などの特徴を完全に越えており、それらと共通ではないので、虚空は四大の相を越えていることはその通りである」と言われる。[3. 35-36]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 1. 2 まとめて区別しない在り方は、「そのように十力と四無畏と十八不共法は垢を離れた結果の三十二の功德と言われるこれらも自利の勝義の法身により区別され、その本質においては差別なく存在する。例えば摩尼宝の光と色と形は差別がないように勝義の功德を区別することはないものであるから」と言われる。[3. 37]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 2 異熟の結果に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 2. 1 特徴である二身に存在する在り方は、「安住する輪による特徴などの善妙なる特徴により飾られる身体を所化が見るだけで「これらは偉大な人だ」と悦ばしい浄心の功德であるものがそれらの異熟果の三十二の功德と言われるものであり、それらも共通に顕現する変化身と大乘の法を完全に受用する身で、色身は二種に依存するものである」と言われる。[3. 38]

3. 2. 2. 2. 3. 2. 4. 2. 2. 2 色身を月の喩例により表す在り方は、「色身を見る妨げとなる障害を浄化してから遠い所化の異生と声聞などと近く所化である十地に住する菩薩には順序通りに世間の衆会の輪において普通の者たちに変化身が現れ、勝者の廻りの輪において菩薩たちを受用する完全な身体が現れ、例えば水の中に月の姿が見え、虚空に月の姿が見える如くである。そのように善妙な特徴により飾られたその二種の身体を見る所化の種姓は二種であるので色身を

明らかに望むことによっても清浄な福分をもつべきである」と言われる。[3.39]

『大乘最上秘論』の宝の種姓を区別してから「功德の位と言われる第三章」の解説をした。

#### 第4章 如来所作品

3.2.2.2.4 今度は、それらの功德を得る能力から勝者の所作が自然に成立して相続が中断されないことに関して、考察をする方法である行為の意味に二つ。自然に成立して相続が中断しない在り方を説いたものと、その同じことを喩例により確定させることとである。

3.2.2.2.4.1 自然に成立して相続が中断しない在り方を説いたものに二つ。簡略に説いたものと、詳細な解説とである。

3.2.2.2.4.1.1 そのうち簡略に説いたものは、「諸仏が衆生利益をなされたならば、究極の所化の界と想と随眠と、種々なる種姓を目の当たりに知っても、これとこれを知るべきであると思う考察が努力なしに自然に成立するものに入り、そのように合わせて所化のそれぞれの想に従って、

何れかの自性への妬みを離れても、執着を衆生に執着のままに示し、所化に関して怒りを怒りと示す最高の菩提に住する彼に敬礼する。

と説かれているように、寂靜と勇猛などの種々なる教化方法を示すことに努力はなく、そのようにそれらの種々なる所化の界の教化の所作が明らかに高く確実に種々なるよいものにさせることも努力がなく、所化が存在するその境である究極の世間界に行くことも努力がなく、所化は教化の時に降りるならばそれらを教化するために行くことに遍満する主である完全なる仏は常に考察などの努力なしに自然に成立するものに入る」と言われており、自然に成立する意味が簡略に説かれている。[4.1]

相続を中断させない意味を簡略に説いたものは、「確実に出る原因の陀羅尼と三昧などの最高の宝となる多くの功德をともなっており、無垢の知恵の水により満ちた大海である菩薩の十地と、近くに示す原因である福德と知恵の集まりである衆生を成熟させる太陽の光のようなものをともなっていて、これにより行く道の乗を残らず確実に成立させてから生じた円満なる原因をともなっていて、勝者の所作は中断するものではなくて、そのようにそれらの円満なる結果は極端と中間がなく広大なので虚空のように満ちた大菩提を得ているのでその所作は中断がないものであり、菩提を得てからも勝義の仏性は力などの功德の自性による無垢をとまなうものが始めから宝庫に似てすべての衆生に差異は僅かたりともなく存在することを見てからそれらを完全に把握することをなされているからであり、完全に把握する理由も如来蔵は虚空に似てそれを妨げる客塵の垢の煩惱と所知障の雲の網に似たものを取り除く必要があるからであり、その障害を取り除く縁も勝者の大悲の力の強風に似たものにより垢の雲を吹き飛ばすこと

ができるので、仏の所作は中断しないものである」と言われる。異門については、「有身の者たちが位では十地と二資糧をも修行し、辺際の菩提を修行して、それによっても衆生の障害を悲心により制圧なされているので所作は中断しないものである」とも合わされるべきである。

[4. 2]

3. 2. 2. 2. 4. 1. 2 詳細な解説に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 1. 2. 1 自然に成立した意味は、「何れかの所化のために入り、何れかの方便により調伏し、何れかの教化の所作と、所化がいる何れかの領域に行き、時機になった何れかの時に教化する者たちにそれぞれの動機の考察は生じるものではなく、努力により動くことがないので、ムニである完全なる仏の所作は常時に自然に成立して働き、種々なる想をもつ所化の界は何れかのためにそれぞれの信解に従って三乗などにより教化する多くの何れかの方法により教化する場合にも自然に成立して入り、時機を明らかに見て、辺際において確実によく入れるように何れかの教化の作用にも自然に成立して入り、何れかの領域において何れかの時が時で、所化が存在する領域と教化する時機に降りる時に行くそれらにも分別の努力なしに自然に成立して入る」と言われる。[4. 3-4]

3. 2. 2. 2. 4. 1. 2. 2 相続が中断されない意味に五つ。名称の区別を説いたものと、意味の本質を解説したものと、それらの区別により示す在り方と、喩例の意味を詳しく解説したものと、まとめて相続を中断させない在り方とである。

3. 2. 2. 2. 4. 1. 2. 2. 1 そのうち名称の区別は、「諸仏が衆生利益をなされたことは中断しない。所作の生起を確実に生じさせる因と、その説示の縁と、それらの因縁に結果を成立させる在り方と、その結果の所作に入る領域を完全に把握し、それらの領域の障害は捨てられ、その障害を断じる縁を考察なしに自らの本質により入るから」と言われる。[4. 5]

3. 2. 2. 2. 4. 1. 2. 2. 2 意味の本質は、「それらの六つの理由は何かと言えば、究竟位において出離する原因は菩薩の十地を順序通りに進むことによるもので、福德と知恵の二資糧はその特別な十の功德を上から上に広げて示す原因であり、そのように円満な原因から生じるのでまた仏の所作は中断せず、それらの究竟の結果は無上なる完全なる最高の大菩提を得るのであって、それ故にまた仏の所作は中断せず、菩提を得てからも一切衆生を仏の心髄を持つ者と見てから完全に把握するからであり、完全に把握する理由も一切衆生のその心髄を妨げる究極の煩惱と雑染の習気をともなって、客塵の垢を制圧しなければならないからであり、一切時にその障害を制圧する原因が大悲により道を示すことであるので、仏の所作は中断しないものである」と言われる。[4. 6-7]

3. 2. 2. 2. 4. 1. 2. 2. 3 それらの区別により示す在り方は、「如来の所作が中断しない原因となる意味の住処は、これらの六種の喩例と意味を順序通りに合わせてから知るべきである。それも菩薩の十地は海の如くで、福德と知恵の二資糧は太陽の如くで、それらの結果の大菩提は虚空

の如くで、菩提により把握される衆生の界は蔵の如くで、その垢である煩惱は雲の如くで、それらを制圧する大悲は風の如くと知るべきである」と言われる。[4. 8]

3. 2. 2. 2. 4. 1. 2. 2. 4 喩例の意味を合わせたものは、「無垢の知恵の水を持ち神通などの功德による宝をとまうので出離の原因である菩薩の十地は海の如くであり、一切衆生に益と樂を育て利益をなすので知覚で示す原因の福德と知恵の二資糧は太陽の如くであり、すべてに遍満するので広大で際限と中間がないので甚深であるからそれらの結果である大菩提は虚空界の如くである。完全なる悟りの法性である功德の尽きることを知らない財産をもつことが始めから自然に成立して存在するので完全に把握される衆生界の自性清浄なる如来蔵は大蔵に似ており、捨てるに相應しい客塵なるもので、自性に遍満し、勝義諦において成立しないのでその自性清浄なる界の障害の煩惱は厚い雲の集まりの如くであり、その煩惱に似た雲を散らす道を示すことが近くに存在するので障害を捨てる縁の大悲は尽きることのないとても強い風の力に似ている」と言われる。[4. 9-11]

3. 2. 2. 2. 4. 1. 2. 2. 5 相続を中断させない在り方は、「以前に十地において二資糧を成立させた位において一切衆生を解脱させようと誓願し祈願することで円満な原因が他により出離し、自分自身で得る大菩提と自性清浄なる衆生界とを僅かな差異もなく等しく見てから所作が有意義だと知り、世間界に限りなく一切衆生の障害を大悲により制圧する所作が完成していないので所化の輪廻が空にならない限り仏の所作は中断しないものである」と言われる。[4. 12]

3. 2. 2. 2. 4. 2 その同じことを喩例により確定させることは、「諸仏には生滅がないので区別は無為の特徴をもつものであるならば、それからどのように輪廻してどうして自然に成立して中断せずに所作に入るのか」と言う疑問と疑惑が生じる迷乱を捨ててから仏の不可思議なる対境に対する信解を起こすために、多くの喩例を明らかにするものにより解説するので、それに四つ。簡略にまとめて喩例により区別したものと、意味と合わせたそれぞれの本質と、目的を述べて時機の意味を集めたものと、さらにまとめて特別に解説したものとである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 1 簡略に説いたものは、「如来の所作は無分別に自然に成立して中断しない門から所化の福分と同じものに入るそのことを示す喩例が九種である。それも身体の究極の変化を示すものは帝釈天の住処から動かずに姿が人の境に生じることで善を請願したようなものであり、言葉の種々なる教誡を説くことは太鼓により四律儀を説くことで天を増益するようなものであり、心の知恵と愛により一切衆生に遍満することは雲により一切処に遍満して雨を降らすことで収穫物を熟するようなものであり、身体と言葉の種々なる変化は梵天が自分の住処から動かなくても変化を欲界の諸天が見てから目的を成立するようなものであり、心の無量の知恵を広げることは太陽の光線が闇を順序通りに取除くようなものであり、心の秘密に依ってから利他をなすことはマニ宝に分別がないように願望を求めるようなものであり、言葉の秘密に依ってから利他をなすことは反響が真実としては成立しなくても種々なる意味を示すようなもの

であり、身体の秘密に依ってから利他をなすことは虚空がすべてに遍満しても有為の色として成立することはないようなものであり、存在が変わる悲から利他を成立させる在り方は大地が一切の所依となってから役立つようなものである」と言われる。[4. 13]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2 それぞれの本質に九つ。変化を示す在り方を自在主の喩例により確実にすべきことと、教誡を説く在り方を太鼓の喩例により確実にすべきことと、智慧を満たす在り方を雲の喩例により確実にすべきことと、変化をなす在り方を梵天の喩例により確実にすべきことと、知恵を広げる在り方を太陽の喩例により確実にすべきことと、心の秘密を宝の喩例により確実にすべきことと、言葉の秘密をこだまの喩例により確実にすべきことと、身体を虚空の喩例により確実にすべきこと、悲に入る在り方を大地の喩例により確実にすべきこととである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1 自在主の喩例により確実にすべきことに三つ。無分別も利他を成立させる在り方と、それと同じものをよく合わせて解説したものと、まとめて生滅がない在り方を説いたものとである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1 無分別も利他を成立させる在り方に二つ。表示する喩例の性質の解説と、表示される意味の性質の解説とである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 1 喩例に四つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 1. 1 清浄な大地に像が現れる在り方は、「次のように例えばまず一つの瑠璃宝の自性をともなってジャンプー洲のこの地面は究極なものになってとても清浄で明らかに無垢なので鏡の表面のように清浄となっており、スメール山の上の三十三に住む天主であるその帝釈は天女などの無量の衆会をともない、最高の住処である勝利宮は土台が四種の宝石からなっており、四種の階段を備え、柱は金と銀と瑠璃と水晶でできており、柱石と肘木と斗栱<sup>6</sup>は貝殻なので作られており、百一のバルコニーを備え、それぞれのバルコニーにも七七の楼閣などで飾られており、その天の住処以外のものが都市を見れば美しい金の網により一切の方向から囲まれており、壁の後ろだては金と銀と瑠璃でできており、美しい四つの屋頂短堵を備え、千の門の一つの不完全さがあり、すべての門も宝石の飾りで下に飾られ、それぞれの門にも鎧を着た五百五百の守護者がおり、一切の通路も金粉を敷いたもので満ちていたりして、その天主の宮殿を輪により導くなどの種々の飾りと、さらにまた諸天の楼閣は種々なる宝石からできており、バルコニーと夏の離宮と棚と網のついた天窓の喜ばしいものなどで飾られており、諸天が妙欲を楽しむ地の森を好み、天の遊ぶ場所などの想像の良い木と飲物と衣服と飾りと花と楽器などの欲しいものが生じ、八支を備えた水で満ちた池と湖は種々なる花と鳥で美しく、一切の通路も種々なる楽器を持つすべての美しい天女で満ちており、一切の大地がマンダーラの花で満ちるなどの天の多く財物の受容の影像が現れる人のその世間において一切のものによりよく見られる」と言われる。[4. 14-15]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 1. 2 それにより善業を修行する在り方は、「それからジャンプー洲の男性

と女性などの衆会と、地上に住む一切の人のすべてにより三十三の究極の財産のその顕現を見て、喜んで続いて求めるようになり、我々も長い間妨げるものなく円満なる受容をとまなうこの天主の帝釈に似て速やかに得るようになりたいと言うそれに似た願いを多く起こして、その帝釈の現高を得るために戒の種類だけを守るなどの善を修行により正しく受けてから住するであろう」と言われる。[4. 16-17]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 1. 3 その業により望む位を得る在り方は、「それらの男性と女性は戒を守るなどのその自善業をよく行うことで帝釈などを見るこれらは影像の顕現が現れただけであるが、天などのこの存在に行くことはないと言うように、正しく知ることがなくても影像を自分で把握してから善行により地上で人の身体から死去して自分が望む天に生まれるであろう」と言われる。[4. 18]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 1. 4 努力がなくても利益になる在り方は、「瑠璃の大地に帝釈などの顕現が現れるそのことは、とてもジャンプ一洲のものたちを善に入れるべきであると考えても動機の考察がなく動くことがなく、そのようであってももしかもしかも地上の人の領域に住する者たちが現実に善を修行し相続してから明らかに望む位において修行することで大きな意義をもつことで住するものである」と言われる。[4. 19]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 2 意味にも四つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 2. 1 清浄なる色身が顕現する在り方は、「その喩例のように信と精進は対立する方向の不信などの垢がないことをともなってから、信と精進と念などの功德を順序通りに修習することで自分の心を浄化して顕現を完成した仏の色身も三十二相による美しさと八十種好をともない、しばしば身体を裂き、そのように起きて、座に座り、睡眠のために横になり、他にも行くなどの種々なる行道の所作をもち、所化に寂靜なる涅槃の法を説いて、しばしば法を述べることなく内部で正しく座って禪定に入り、神通などの種々なる神変をなして、光輪をとまなうので大きな光彩をとまなうなどの無限に変化して福分をもつ衆生により見られるであろう」と言われる。[4. 20-22]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 2. 2 それを望む位を成立させる在り方は、「自分の清浄な心に現れるその色身を見てからも悟りを得ることを望む欲求をとまなう門から仏性を速やかに得るために聞などの善を加行して、そのようにその悟りを成立させる原因を思い菩提に発心し、修行の六波羅蜜などを正しく受けてから順序により修習してから望む結果の辺際に至るなどの仏の位を得る」と言われる。[4. 23]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 2. 3 努力がなくても利益になる在り方は、「清浄な心に現れるその仏は、しかも『衆生利益はこれこれのようになす』と考える動機の考察はなく、努力により決して動かないものであり、そのようであっても仏身を見る彼は世間において所化を現実に大きな善根を合わせて、相続してから一切智を修行することで大きな意義をとまなうことで住するもので

ある」と言われる。[4. 24]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 1. 2. 4 次第により究極の法身を得る在り方は、「この無限の色身の変化は、「自分の清浄なる心に勝義の仏の影像が顕現するだけで、究極の仏ではない」と言い凡夫の異生は正しく知らないけれども、そのような際も仏の色身を見てからも見た者のそれらの所化に大きな意義が存在することになる。次第にその色身を見ることに依ってから仏を得るために大乘のこの甚深なるものに住し、道を受ける福分をもつ者によりそれぞれの内部の自分で知るべき勝義の心の自性光明なる法身をすべての相の最高を備える空性が禪定の無分別の知恵の眼により目の当たりに明らかに見るであろう」と言われる。[4. 25-26]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 2 それと同じものをよく合わせて解説したものは、「例えばジャンプ一洲の大地は残らずすべての崖と溪谷などのその他不安な場所を離れてから無垢の瑠璃の自性光明と美しい形などのマニ宝の垢を離れた吉祥なる功德を備え、表面は辺際が掌のように等しくなっており、それ自身が清浄で明らかに無垢なので鏡の表面のようになり、そこには天主の住処である最勝宮などの集まりと、諸天の帝である帝釈と、その天とは異なる多くの種と、天の実体の無限の受容の像を生じて、最後は次第に地の功德の光明などを離れているのでその像は再び顕現することはなく、顕現が現れることに依ってからその帝釈の受容をともなうものを得るために八支の斉戒などの持誓と確かな布施と供養などに明らかに向かう女性と男性の衆会たちが天主を得ることを信解する心により花と香などを散らして撒くことでよく種々なる行に入るように、垢を浄化する瑠璃に似た自分の清浄な心に顕現するムニの主を得るために、仏を歡喜する心をもつ王子である菩薩らも、人が天主を得るために善をなすそのように、菩提の最高の心を起こしてから六波羅蜜を成立させることを努力する」と言われる。「不浄なる大地に像は顕現しないように、福分をともなはない者により仏は見られない」と言われる。[4. 27-28]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 1. 3 まとめて生滅がない在り方を説いたものは、「喩例は、例えば人の世間における瑠璃の大地は塵などの垢がなく清浄となるものに受容をともなう天主の身体の像が顕現するようにその意味のように所化の有情の心の大地で不信などの垢がなく清浄となったものに随相を備えたムニの主の身体の像が現れ、そのような際も所化の有情に仏身の像が現れたり沈んだりする顕現は、不信などの汚れがなく清浄なる自分の心が働くことにより像の身体の現れることが顕現し、不信などの汚れをともなう不浄なる自分の心が働くことにより像の身体が沈むことが顕現し働くのであるが、喩例は例えば人の世間において大地の清浄と不浄とにより天主の像の出現と沈むこととしての顕現も天主自身が自らの場所から動くことがないように、その意味のように所化の浄と不浄とにより色身に生と滅として顕現しても、勝義の法身を有の生と無の滅と言うようには決して見られない。無為で変化がないものであるから」と言われる。[4. 29-30]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2 教誡を説く在り方を太鼓の喩例により確実にすべきことに三つ。天の太鼓の

ように正法を説く在り方と、諸喩例より特に勝れた在り方と、それらも縁から入る在り方とである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 1 説く在り方に、喩例の意味と同じ理由の詳細な解説と、さらにまたうまく合わせてまとめたものである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 1. 1 詳細な解説に三つ。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 1. 1. 1 努力のない在り方に、「喩例は、例えば天の領域で一切の天の以前の善行である白善業に従って集めた力により大太鼓には言説を望むなどの努力と舌と顎などの言葉が生じる場所と意をとまなう肉体と動機の考察は存在しないように一切の有為は無常であって、一切の有漏は苦で、一切法は無我で、一切の涅槃は寂靜であると言う声が生じることにより望む功德に心を動かすことで放逸するであろう一切の諸天を何度も法の大太鼓により善を鼓舞するように、その意味のように遍満主である完全なる仏はこれとこれを示している。考える言説を望む努力などを離れても所化の有情すべてを自分の言葉に合わせて入る仏の言葉で満たして、三種の種姓をもつ福分をとまなう者に三乗の広大な法を示されている」と言われる。[4. 31-33]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 1. 1. 2 行為から生じる在り方は、「例えば天の境において諸天の大太鼓の声から法の四律儀を示して、以前の諸天自身で白善業に合わせて集めたものから生じたそのように世間においてムニの完全なる仏が所化の想に合った無限の法門を説いたものも、衆生が自分の広大な善業を集めた力から生じたものである」と言われる。[4. 34abcd]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 1. 1. 3 滅を成立させる在り方は、「喩例は、例えば言説を望むなどの努力と、声が生じる場所と、意をとまなう身体と、動機を考察する心を離れた大太鼓のその声から諸天による放逸を寂滅させるように、その意味のように努力などのその四法を離れる門から自分の福分に合わせて説かれたこの法も、無限の所化の相続を寂靜の涅槃の位を成立させる」と言われる。[4. 34efgh]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 1. 2 まとめたものは、「喩例は、例えば天の都城において法の大太鼓の音が鼓舞した原因から生じたので無畏を与えることは、諸天が煩惱の瞋恚により阿修羅との戦いのために戦争に入る時に『諸天を畏れるな』と言う声から阿修羅の軍に打ち勝つ恐怖を取除き、煩惱の貪欲による欲楽における娯楽に執着するならば法の四律儀声から放逸を取除くように、そのように所化の無限の世間において仏法を説くことに依ってから禪定と無色三昧の修習などの善根を広げる原因から生じることで一切衆生の煩惱と苦による畏れを制圧して、寂靜の涅槃という無上の道の在り方を正しく述べてからその位を得る」と言われる。[4. 35]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 2 それ故に諸喩例より特に勝れた在り方に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 2. 1 特に勝れた在り方を簡略に説いたものは、「何故ならば所化の無限の生類はすべて自分の想に相應して遍満することによる孤独ではないものと、辺際の確実なよい位

を修行することによる利益と、時機が明らかに高い歓喜を修行することによる安楽と、神通の神変と説法の神変と教誡の神変の三種をとまなうことによる苦からの出離とであって、その功德の四法をとまなっているのでムニの完成した仏法を説く声は天の物である鏡という孤独と利益と出離ではないものよりもとても特別に勝れたものである」と言われる。[4. 36]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 2 特に詳細な解説は、「天の無限の場所では太鼓の大きな音で満たして行っても、その同じ大地に住する衆生の耳には至らない孤独なものであり、仏法を説く太鼓の音は折りがよいので所化の輪廻に地下の世界にも遍満して至るので孤独なものでないから特に勝れている。そのように合わせて、天には天の鏡の類似するものない多くの劫も後に欲望がある楽に執着する火を明らかに広げるために鳴るので利益ではなく、大悲の自体をとまなう完全なる仏の言葉の声は一つの異門だけでも所化の福分をとまなう者の苦の火を集める原因をとまなうものを寂滅する涅槃を得るために働くので利益であるからまた特別に勝れており、天では莊嚴が美しく聞のみから意に合った鏡の音が多種でも、心は境における衝動と散乱を広げる原因であるので楽ではなく、大悲の自体をもつ如来の言葉は所化が禪定と三昧に心を転向して鼓舞する原因となるので楽であるからまた特別に勝れている。まとめれば天の物である鏡は出離しないが、すべての世間界においても天と地上に住する人などの苦をとまなうものを捨ててから無漏の大楽を広げる原因であるものが三種の神変をとまなう門からすべての世間界に遍満して現れる仏の言葉に正しく依って述べられるので苦を出離するので特別に勝れている」と言われる。[4. 37-40]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 2. 3 それらも縁から入る在り方は、「喩例は例えば耳根を離れることで極微の音が領受できず聞くことができないうように、福分をとまなわないものにより説かれた音は聞こえず、声の一切の特殊性は天の耳を得ても耳の道に至らずに少しばかり至るように、そのようにとても微細で甚深なる仏法が最も微妙な知恵のみの行境に成立しても、所化の一切の種姓の耳の道に成立することはなく、煩惱のない意をもつ最上の大きな福分をもつ者の耳の道に成立するのである」と言われる。[4. 41]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3 智慧を満たす在り方を雲の喩例により確実にすべきことに四つ。収穫を広げる法に合った修行と、器から成立する法に合った修行と、見ることがない法に合った修行と、火を消す法に合った修行とである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 1 収穫を広げる法と同じものに二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 1. 1 努力のない在り方により簡略に説いたものは、「喩例は例えば雨期の時に大きな雲の集まりが密集してから、国土の円満な収穫が生じる原因となる雨の水の蘊を努力なしに大地に明らかに降らすように、その意味のように無量の大悲の雲から一切の勝者が知る正法の水の大雨を有情の国土に尽きることの知らない善の収穫を広げる原因となっても動機の考察と努力なしに自然に成立して降らせる」と言われる。[4. 42-43]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 1. 2 縁により入る在り方の解説は、「喩例は例えば世間の人が善業道に入り不放逸を修行すれば、諸天の力により風がゆっくりと混ざってから生じる雲の集まりから水の雨が次第に降るように、その意味のように所化の有情たちも信と精進などの善を明らかに広げれば、諸仏の心の大悲の風により混ぜられた雲から正法の大雨を降らせる。そのように雲に似た原因も存在の輪廻に住する所化の国土に利益をなすために完全なる智が大悲の存在に依存してから智により無我の辺際が考察されるので変化する輪廻の過失が着かず、心で衆生を把握するために変化しない涅槃の過失が着かない虚空の輪に住し、無垢の三昧と陀羅尼の無限の門の無垢なる水の心髄をとともなうものになるムニの主である完全なる仏の雲は善の尽きることの知らない収穫を広げる原因であるから」と言われる。[4. 44-45]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 2 器から成立する在り方の二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 2. 1 喩例は、「例えば虚空から雨を降らしてから触は冷たく、味は美味しくて甘く、身体を損なわないから柔和で、運びやすいので軽く、とても清浄で無垢で、たくさん飲んでも腹をこわさず、首を損なわないで、八支を備えた一味の水がその雲の塊から次第に出て降るならば下の大地における塩分の有無などの種々なる場所と結びつくことで苦さと甘さなどのとても多くの味と効能が種々になる如く」と言われる。[4. 46abcd]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 2. 2 意味は、「そのように仏法を説くならば正法は八正道をともない、甚深なるその通りに一味の水の雨が大きくて広大な大悲の雲の蔵から次第に出て降るならば、所化の有情の相続の界と想と根などの種々の場所の区別から三乗などの多種の味をとともなうであろう」と言われる。[4. 46efgh]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 3 見ることのない在り方に三つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 3. 1 三種の喩により簡略に説いたものは、「諸仏の一切法のその同じもののように、一味の在り方は、最高乗の法の雨を降らしてから清浄で信解<sup>7</sup>が確実な衆生の蘊と、信解と不信解の中間に住する不確定な衆生の蘊と、怒り信解せずに誤りを確定する衆生の三種の蘊は順序通りに、雨を降らせたならば人が喜び信解することと、チャータカ鳥が中間に住するのと、餓鬼が怒り信解しないことに似ている」と言われる。[4. 47]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 3. 2 その意味の詳細な解説は、「春の終わりの初夏の時に雲がないことで雨が降らなければ人は苦しみ喜ばず、雨が降れば喜び、空を飛ばない鳥であるチャータカ鳥は決して水を見ることがないので雨を喜んだり喜ばなかったりの中間に住し、雨期に降る時に大地に大雨が降れば熱波の雨として現れるので餓鬼はとても苦しみ喜ばずに住するように、諸仏の大悲の雲の塊により甚深で広大な正法の水の雨が世間に生じることと生じないこととからも順序通りに、法を望むことが確実な衆生の蘊は法の雨が生じれば喜び、生じなければ喜ばず、不確定な衆生の蘊は法を喜ぶことと喜ばないことの中間に住し、法を嫌う誤りを確実にする衆生の蘊は法の雨が生じなければ喜んで住する。それらの三義を示すことを世間におけるその三種

の喩例と合わせるべきである」と言われる。[4. 48]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 3. 3 見ることのないものに入る在り方は、「例えば激しい大雨と雹を降らし、ある者の業により電光の雨を降らし、金剛の火と雷を降らす場合に大地に住する微細な命を損ない、山間部に行く者の命を損なわないなどのことを雲の蘊が見ることがなく入るように、諸仏の微細で甚深で大きく広大な法の雨が論理と方便に巧みな在り方により智慧と悲の雲から生じても、煩惱を浄化する<sup>8</sup> 福分をもつ者には広大な利益が生じ、我見の堅固な随眠をもつ福分のない者にはしばらく現れなくても、それらの利害をすべての面で見ることなく入る」と言われる。[4. 49]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 4 火を制圧する在り方<sup>9</sup>に三つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 4. 1 苦の火の集まりを寂滅させる在り方は、「三種の雑染によりまとめられる十二支縁起の周囲における輪廻に関して生死などによる苦はこの始めのみから生じることの確定もなく、解脱の道を修習がこの終わりから滅する確定もないその場所の有情が行く道は五種である。地獄と餓鬼と畜生との三悪趣と、人と天の二善趣である。それ故に不浄なものに決して好ましい香りがなくように五趣の輪廻においても楽な位は少しもない。三と八などの苦にとても苦しんで存在するものであるから。その輪廻の苦の特殊性も常住で連続する大火により焼かれ、鋭い武器により打ち込まれ、新しい傷を氷と塩などで触ってから生じる苦の感受のように、とても耐え難く存在するものを仏がそれらの苦から解放されることを願う大悲の雲から甚深で広大な正法の大雨の意味を受ければ、その火の群を寂滅させ、自分の福分に従って中断せずに降る」と言われる。[4. 50]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 4. 2 寂滅させる智慧が順序により生じる在り方は、「天においても死に至る苦と、人にも無を求め、有を守り、飢えと渇きと疲労などの苦をともなっていると考察されるので、輪廻と涅槃の本質を知る智慧をもつ賢者は天主である帝釈などと人の主である転輪王などの最高の位さえも明らかに望むことはない。以前の生により得られた智慧とここでも如来の無垢なる教説に対する信により随順し、聞と思との在り方のままに為してから有漏をともなう結果のこの水はすべて苦で、この業と煩惱のすべてはその原因の集で、それらの輪廻の原因と結果を残らず滅するこれが滅の涅槃であると言われ、道の無我の考察の清浄なる智慧により正しく見るから」と言われる。[4. 51]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 3. 4. 3 知られるままに捨取を受ける在り方は、「例えば病気の苦を離れてから無病の楽を得ることを望む知を持つ者が病気の本质である在り方を知ってからその病気を起こす原因と出会わない食事などは捨てられるものであり、無病の楽に住することは得られるべきであり、その方法である薬はよく依存すべきものであるように、そのように輪廻の苦を離れてから涅槃の楽を得ようとする智をもつ者によっても有漏の結果によりまとめられる輪廻はすべて苦と知ってから、その原因である業と煩惱によりまとめられる究極の集は捨てられるべきも

のであり、それらの垢を離れた滅とそのように涅槃の樂を目の当たりに触れて得られるものであり、その方法として無漏の五道を次第に相續して依存されるものである」と言われる。[4. 52]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 4 変化をなす在り方を梵天の喩例により確定することに二つ。福分があるものに顕現を示す在り方と、福分のないものに顕現がない在り方とである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 4. 1 顕現を示す在り方に三つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 4. 1. 1 努力なしに対応するものが、「喩例は例えば色界の天である大梵はブラフマンの住処である初禪の宮殿以外に動くことはないように、望めば行の天の住処の六種すべてにおいて変化の顕現を努力なしに示すように、その意味のようにムニの完全なる仏も勝義の法身とは別に決して動くことはなく無限の世間界において普く福分をもつ所化たちには努力なく自然に成立して、世俗の色身の変化によりあらゆるところで教化の種々なる変化が示されている」と言われる。[4. 53-54]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 4. 1. 2 過失を取り除くことで対応して示したものが、「例えば大梵天は常時に自分の宮殿から動くことなく住するようになり、変化身により欲界の天の一切の住処に遍満して入るそのものが、望めば行の天の六種により見られるだろうし、色界の天のその財産を見ることに依ってから欲界のその多くの天も梵天の位を得るために、望む功德の美しい身体と美しい声と妙香と美味と柔らかな触など境を喜ぶ執着を捨てるように、そのように善逝たる完全な仏も法身から決して動かさずに入るように、変化身により世間界を残らずにすべて無限の変化を示すそのことを福分をもつ所化の者が見て、色身のその変化を見ることに依ってから福分をもつその多くの所化も仏の円満を得るべきであるから、常時に二障の習気をとまなう垢を残らずすべて取除くことに合すものである」と言われる。[4. 55]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 4. 1. 3 福分を見ることで対応して示したものが、「以前の時に諸天の利益をなす梵天自身による誓願をなす力と、望むならば行の諸天により梵天を見るようになる善に合ったものを集める力から、例えば梵天が努力なしに欲界に顕現することを示すように、自ら生じる完全な仏の変化身もそのように仏の前世の誓願と所化の善の力から、法身から努力なしに世間に種々なる変化を示すのである」と言われる。[4. 56]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 4. 2 福分がないものに顕現がない在り方は、「諸仏が所化の時に降りる際に、兜卒天の住処からジャンプ一洲に移り、母である偉大なマーヤー<sup>10</sup>などの胎内に入り、ルンビニーの森林などにおいて生まれ、父の王宮の薄黄色の大都城に入り、八千人の後の衆会などと一緒に歓喜遊戯し、王宮から明らかに出てとても静かな場所で難行をし、菩提座に行ってから魔の軍勢をとまなうものを制圧し、金剛のような三昧に依ってから大菩提を獲得し、有身の者たちに寂靜の涅槃の都城に行く道を示す法輪を廻す在り方などをよく示してから、まず相應しなくなる意味をなすことを完成することを見てからムニの主たちが涅槃の在り方を示し、仏を見

る福分のない衆生の眼の道には顕現しないものである」と言われる。[4. 57]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5 知恵を広げる在り方を太陽の喩例により確定した在り方に四つ。利益と損害を考察しない在り方と、考察せず利他をなす在り方と、福分から次第に解説する在り方と、喩例よりも特に勝れた在り方とである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 1 そのうち考察しない在り方は、「例えば太陽の光線は熱いので輝く時の同一時に花の赤蓮華の集まりは開くであろうし、花の黄蓮華の集まりは閉じている際にも『水に生まれた赤蓮華が咲いた』と考えたり、『黄蓮華は閉じている』と考える門から、開花の功德と閉じる過失を日輪は考察することはなく入るように、ここでも偉大な聖者である完全なる仏の太陽によってもそのように正法の光線により輝く時の同一時に所化の智慧の蓮華は開き、所化ではない意の黄蓮華は閉じてしまっても、仏は利害を考察することはないので明らかに入っている」と言われる。[4. 58]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 2 利他をなす在り方に三つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 2. 1 考察しないで利他をなす在り方は、「喩例は例えば日輪は考察することはないように、自らの無限の光線を瞬時に広げることにより花の赤蓮華の集まりが開花し開かせ、他の円満なる特別な収穫物を成熟させるように、その意味のように如来である完全な仏の日輪も正法の無限の光線を一瞬に広げることにより所化の人の赤蓮華の集まりに功德の花びらを開花させ、善の収穫物を成熟させてもそれらを考察することなく、自然に成立して入る」と言われる。[4. 59-60]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 2. 2 光明を広げることで利他をなす在り方は、「例えば日輪が虚空界に昇る光線により世間の闇を取除くように、自利の勝義の法身と利他の世俗の色身の二種の輪を完成することにより広げた辺際をすべて離れた菩提座が出現する虚空に昇る一切智の法王の太陽も、所化のすべての有情に智の知恵により正法の種々なる光線を広げることで無知の闇を取除いている」と言われる。[4. 61]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 2. 3 瞬時に昇ることで利他をなす在り方は、「例えば清浄な水で満ちた多くの器に太陽の像が瞬時に現れるように、何故ならば無限の所化の相続が煩惱などの垢により浄化されるので、清浄な水で満ちた器に似てすべてのものに善逝の色身が太陽の像に似て無限に瞬時に現れるので円満なる利他をなしている」と言われる。[4. 62]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 3 次第に解説する在り方に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 3. 1 説かれたものは、「常時に一切の有法を区別することなく遍満するとても清浄なる虚空の輪に似た法界に大きな太陽に似た完全な仏が現れてから所化の人の山に似たものに相応して福分に相応して次第に照らして現れる」と言われる。[4. 63]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 3. 2 解説したものは、「例えば広大な何千もの光線をともしう太陽が虚空界に出現するこれが四洲の世間を光線により普く顕現させてから次第に最初に最も高い山を照ら

し、それから中間の山を照らし、最後に低い山を照らし現れるそのように、知恵の広大な光線をとまなう勝者の一切智の太陽が法界の虚空界の輪に現れるこのことも、所化の衆生の集まりを次第に照らしており、最初に福分が最高になる者に現れ、それから福分が中間になる者に現れ、最後に福分が劣った者に現れるので他者を成熟させている」と言われる。[4. 64]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 4 特に勝れた在り方に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 4. 1 光明により特に勝れた在り方は、「凡夫の太陽より仏の太陽は大きいので最高であると示すことで、太陽にもそれぞれの方向だけに遍満する光線を広げる効力があるといえども、仏国土の界を残らずすべての虚空の一切の底に遍満して知恵の光線を広げる効力は太陽にはなく、仏にあることで遍満しているので特に勝れており、そのように太陽に凡夫の闇を取除き、それぞれの方向の物質のみを明らかに示す能力はあるが、無知の愚かな闇により妨げるものを取除いてから所知の本性の意味を明らかに示す能力もあるのではなく、大悲の主体をとまなう完全な仏である太陽に三乗などの種々なる色彩をとまなうものが放つ無限の教説の光線の集まりにより無知の闇を取除いてから、知恵の顕現を明らかにするこれにより所化の無限の有情に所知の如実と如量の本性の甚深なる意味を明らかに示す力が存在するので大きな意味をとまなうことで特に勝れている」と言われる。[4. 65]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 5. 4. 2 所作により特に勝れた在り方は、「凡夫の太陽が世間に出ても、盲人が物体を見ることや、輪廻の苦を取除くことや、甚深なる法性を見ることなどができず、仏の太陽が所化の村に行き出る時に眼のない盲人が眼を備えて物体を見て、そのように聾者が声を聞き、狂人が心を静めて来て、貧者が家から財産を得て、悪趣などが明らかに望む利益がないことで心を苦しめるそれらの集まりを離れてからその仏の利益を見ることだけから如何なる望んでいる楽を領受し、まとめれば愚かさの眼翳による知恵の眼なしに来る<sup>11</sup>ので存在の大海の無限の苦の底に落ちて、種々なる悪見の厚い闇により心の自性が覆われた無限の有情は仏の太陽が世間に出る所作の光線により知恵が顕現し所知を次第に明らかにするので、愚者が以前に知らずに見なかった場所である甚深なる法界の真実を目の当たりに見るので、所作の門からも最高のものである」と言われる。[4. 66]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 6 心の秘密を宝の喩例により確実にさせることに二つ。願いを成立させることにより等しく説いたものと、得難いことにより等しく説いたものとである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 6. 1 願いを成立させることに二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 6. 1. 1 分別なしに九欲を成立させる在り方により詳しく解説したものは、「喩例は例えば如意宝珠は「これとこれを与える」と言う動機の考察がなくても瞬時に周辺の行境にとどまり、請願する人が思う種々なる食物と衣服と麦と薬と住处などの如何なる望む想を残らずすべてそれぞれ混ぜずに完成するように、その意味のように完全な仏の如意宝珠に依ってからも三種の種姓をもつなどを信解する種々なる想の無量の所化が自分の福分に従って三乗な

どの種々の法を聞き、それらの意味を完成させるならば、その仏法を説くその時機に「これが説かれる」と思う想は僅かたりとも考察しないことである」と言われる。[4. 67-68]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 6. 1. 2 努力なく常に入る在り方により説いたものは、「例えば如意宝珠に動機の考察はないように、何れかのものを望む財産の実体を努力せずに請願する人が他の者たちに与えるように、そのようにムニの主である諸仏も考察などの努力なしに自分に相応しい通りに合わせて説法などの他の所化の究極の利益を成立させるためにこの存在の無限の輪廻にとどまる限りは中断せずに常時に入られている」と言われる。[4. 69]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 6. 2 得難いものは、「何故ならば大海の中の水や大地の下の場所にその物を求めて望むことにより、例えば目的を望むことをすべて成立させる美しい如意宝珠を低い福德のこの有情が得ることは難しいように、輪廻にとどまる無限の有情のすべてもとても時代がとても悪く、種々の煩惱と雑染により捉えられているので、自分の垢をもつ者がここで善逝の二身の顕現を見ることは最も得難いと知るべきである」と言われる。[4. 70]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 7 言葉の秘密をこだまの喩例により確実にすべきことのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 7. 1 喩例は、「例えばこだまなどの響きの音は種々に現れるそれは縁により他の聞く者自身の言説に従う認識のみから生じ顕現するが、こだまなどは動機の考察はなく、「これにこれを述べるべきである」と考える功用も努力もなく、音の自らの本性もこだまなどの外にもとどまらず、内にとどまらないように」と言われる。[4. 71]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 7. 2 意味は、「そのように如来の正法を説く言葉は種々に顕現しても所化により他の聞く者の自分の想に従った認識のみから生じ顕現するが、仏には動機の考察は何もなく、「ここでこれを示すべきである」と考える功用も努力は何もなく、声自身の本性も仏身の外にもとどまらず、内にもとどまらない」と言われる。[4. 72]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 8 身体秘密を虚空の喩例により確実にすべきことのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 8. 1 喩例は、「事物としては僅かたりとも成立することなく、根と識に顕現はなく、それらの対象が境に成立することがなく、所依の基体も存在せず、特に眼根の道も超えており、妨げのある物体として成立することがなく、「他の眼の境ではこうである」と言う説としても存在しない特徴をもつ無為なる虚空に対して例えばある者が真中の部分の顕現を高いと、辺際の部分の顕現を低いとか四角や球や青や黄色などの種々に見えても、勝義においてその虚空は種々に顕現するそのように真実として存在するものではない」と言われる。[4. 73-74ab]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 8. 2 意味は、「そのように胎内に入り、誕生し、樂涅槃し、亡くなり、立ち上がり、身体の色が種々で、異なる浄土などの無限の一切の変化を完成する仏に対して存在すると所化の多くの種姓により見られても、勝義のその仏は生滅などの種々に顕現するそのように意味には真実として存在しない。変化がないものであるから」と言われる。[4. 74cd]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 9 悲に入る在り方を大地の喩例により確実にすべきことのうち、
3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 9. 1 喩例は、「例えばこの大地から生じる植物と森林の花など『これらすべてを生起させる』と言う考察と努力のない大地に依ってから先に存在することなく新たに発生し、先に存在する根を堅固にし、一切のものも上から上に木を広げることで衆生を育てるように」と言われる。[4. 75]
3. 2. 2. 2. 4. 2. 2. 9. 2 意味は、「そのように勝者である完全な仏は大地に似て『これらの意味をなす』と言う考察と努力のないものに依存してからも所化の無量の有情の二資糧の善根の一切の収穫物を残らず広げ、堅固にし、大きくすることで究極の衆生の養育をなしている」と言われる。[4. 76]
3. 2. 2. 2. 4. 2. 3 目的を述べて時機の意味を集めたものに二つ。目的と喩例の意味の区別と、喩例により示す在り方を特別に解説したものである。
3. 2. 2. 2. 4. 2. 3. 1 区別に四つのうち、
3. 2. 2. 2. 4. 2. 3. 1. 1 目的と必要な目的を成立させる在り方は、「普通の者の知恵の境において努力が僅かたりともなしになした者が自然に成立する在り方によりなすことを決して見ることなく、それ故に所化の想に仏の所作は努力のないものであるならば、衆生利益が自然に成立する在り方により『所作が矛盾する』と言う疑惑が生じるので、煩惱であるそれらの疑惑を断じて捨てるために、帝釈の像など九種の喩例により努力がなくても所作をなすその在り方が説かれており、それも何れかの教説において仏の所作を示すこれらの九種の喩例は詳細に理由をとまなうことで明らかに説かれている経典の名称はこの『如来莊嚴智慧光明一切仏境界』に言われるそれ自身により喩例でのその解説の目的自身である目的を成立させる在り方もよく説かれているものである。そのような教説と意趣の解説をこのように聞いてから生じる清浄な智慧のこの広大な顕現により莊嚴された智慧をもつ菩薩らが速やかに仏の行境に成立する所作を努力なしに自然に成立させる在り方すべてを最初に考察する門から入り、最後に成立させる在り方によっても入るからである」と言われる。そのように実体としての所作における疑惑を断つことが近くの目的であり、相続してから「仏の行境に入ることは目的の目的である」と言われる。[4. 77-79]
3. 2. 2. 2. 4. 2. 3. 1. 2 喩例と意味をまとめて説いたものは、「努力なくその所作をなす意味を示すために瑠璃の大地に帝釈の像が現れるなどの喩例の九種を上により詳細に述べたそこに喩例により表されたその簡略な意味を確実に把握して説いたものがこれらである。すなわち、帝釈の喩例による所化に相應して身の種々なる変化を示すことと、大太鼓の喩例による福分が如実に説くことによる正法の教誡を説くことと、雲の喩例による心の智と悲により一切における遍満と、梵天の喩例による身と言業による無限の所作を変化と、太陽の喩例による心による所作の知恵に依ってから正法の光線を放つことと、宝の喩例による考察がなくても目的を願うことを求め

る心の秘密と、こだまの喩例による文字がなくてもよく解説することを示す言葉の秘密と、虚空の喩例による物質として存在しなくても所化が見る身の秘密と、大地の喩例による一切の功德の所依の場所となる大悲の主体を得て究極の有情の求めるものを説いている」と言われる。

[4. 80-81]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 3. 1. 3 三つの意味に合わせて解説したものは、「正しく完成した悟りが利他を成立させるならば、所縁をとまう努力の相続を残らずすべて寂滅する門から入っている。一切の考察がなく、捨てる悲心で究極の自性光明が明らかに成立するから。例えば人の世間に無垢の瑠璃の大地に成立して天の主である帝釈の像が現れることなどが努力なくても所作をなすように。そして「所縁をとまう努力のすべての相続を寂滅している」と言うことは誓願の意味を説いたものである。「考察のない究極の心が出現しているから」と言うことはそれを成立させる証因である。そのようならば努力は如何なるものもなく、利他が自然に成立する自性のその意味は所化の智慧の境に成立させるために表す喩例は帝釈の像と大太鼓の音などにより前に説いたものである」と言われる。[4. 82-83]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 3. 1. 4 時機の意味を努力することのない在り方は、「仏の所作をなすこの時機に喩例により表される時機の意味はこうである。すなわち、変化を示すことと教誡を説くことなどの九種の意味は前に解説しているので、師である完全な仏が生と死などの有為の諸法を離れることを考察することなく、「これとこれをなす」と思う努力がなくても所化に所作を成立させる在り方により入ることを示している」と言われる。[4. 84]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 3. 2 示す在り方に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 3. 2. 1 喩例の区別を説いたものは、「仏の所作が自然に成立し中断しないことを近くに表す喩例は、帝釈が自分の場所を動かずに像を大地に出現することで人の利益をなすように、大太鼓により努力なしに法の四律儀を示し、雲により虚空に遍満する雲が収獲物を成熟させるように、梵天が色界から動かずに変化が欲界において説かれることで諸天の利益をなすように、太陽には考察がなく無限の光線を放つことで闇を取除くように、最高の宝石である如意宝珠の自在王には考察がなくても願望を残らず求めるように、真実として成立しなくても種々に顕現する反響などのこだまのように、物体としては存在しなくてもあらゆるところに遍満する虚空のように、考察と努力がなくても一切の所依をなす大地のように、無限の輪廻のこの存在に住する限り中断せずに努力なしに自然に成立する門から利他をなす所作のその在り方は最高のヨーガ行者は理解するが、普通の者には不可思議である」と言われる。[4. 85]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 3. 2. 2 意味と合わせて解説したものは、「完全な諸仏が利他をなすことは、例えば人の世間が宝石の瑠璃の大地に変化して天の主である帝釈の像が顕現するように、法身から揺れ動くことなく福分をとまう所化たちに色身の無限の変化を示している。すなわち身の顕現と、そのように心を等しく設定しない者は等しく設定し、等しく設定した者は解脱をなすた

めに、言葉による教説と随説をよく教える在り方に諸天の大太鼓で法の四律儀を示すものに似ており、心が一切の所知に遍満する主体である諸仏の如実と如量の智の知恵と、輪廻の苦から解放されることを願う大悲がすべてに満ちている雲の集まりに似て無限の所化の有情を存在の頂きの間にも遍満して入っており、梵天が色界から動かずに欲界において示すように無垢の場所である法界から僅かたりとも動かずに自分の信解に従って身と口の変化が似ていない多くの相を示し、太陽が光線の明りを放つように知恵に依ってから正法の光線の無限の明りが広がるものでもあり、無垢で清浄なる最高の宝である如意宝珠に似て考察がなくても願望を求める心の秘密は不可思議で、勝者の完全なる諸仏のその言葉の秘密も反響などのこだまのように種々に聞こえても文字の本質として成立することはなく、身体の秘密は虚空のように一切に遍満するものであり、形体などは種々に顕現しても物質として成立することはなく常住なものであり、大地による収穫物などが生の所依をなすように所化の無量の有情の相続に白善法の収穫物と薬油を残らず広げ堅固にし大きくするすべての相の基盤や所依となることが、一切の住処を完全に大悲をもつ仏地を得ることである」と言われ、「九種の意味をもつものである」と言われる。[4. 86-88]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 4 さらにまとめて特別に解説したものに二つ。色身に生滅が顕現しても法身には生滅は存在しない在り方と、法に従うことで等しく顕現しても従わないことで特に勝れた在り方とである。

3. 2. 2. 2. 4. 2. 4. 1 顕現しても生滅が存在しない在り方に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 4. 1. 1 自在主の喩例により生滅が存在しない在り方は、「仏世尊は常に生がなく滅がないものであるならば、生と滅を見る理由はどのようなものかと考え、善根を集めることに依ってから大地の清浄な瑠璃に似たものになる自分の心は無垢で清浄となり、完全な仏の身体を明らかに見る理由やその心を浄化する方法は対立する方向の不信などの縁により退けられない門から信などの根をととも広げ堅固になるものであり、そこで大地の浄と不浄とにより像が出たり沈んだりするように、所化の信などの善根が生じ滅するならば、それらにより順序通りに諸仏の世俗の色身は生と滅が現れても、帝釈は自らの本質の三十三の場所から動かないように、ムニの一切智は自らの本質の勝義の法身に変化はないので、生と滅がない」と言われる。

[4. 89-90]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 4. 1. 2 一切により中断しない在り方は、「また諸仏に努力がないのならば、所作が連続する理由はどのようなものかと考え、帝釈などは努力がなくても像の出現などにより利他をなすそのように、諸仏にも考察などの努力は何もなく始めから生はなく、滅がない法身が目の当たりになってから動かないように、所化が輪廻の無限のこの存在が欠けることなく存続する限り身の変化を示し、言葉の教説を説き、心の悲による遍満などの所作が自然に成立することが中断せずに働いている」と言われる。[4. 91]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 4. 2 等しくても特に勝れている在り方に二つのうち、

3. 2. 2. 2. 4. 2. 4. 2. 1 まとめて説いたものは、「仏の所作を表すこれらの九種の喩例の簡略な意味は後から解説するであろう本書により示されており、そこで尽きることのない喩例が前に続いて後を示す順序を確定する原因も解説するものである。それも前の喩例は前のものにより仏の所作を残らずに表すことはできず、法に従わない部分である後の喩例が後のものにより順序通りに捨てられ、法に従って説かれた門から述べているから」と言われる。[4. 92]

3. 2. 2. 2. 4. 2. 4. 2. 2 詳しく解説したものは、「完全な諸仏の所作をなすことは、身の無限の変化を示す瑠璃の大地に帝釈の像の顕現の如くであって、しかも色は音をともなわず、仏は法を説く音をともなうので似ておらず、特に勝れたものである。そのように法を説く音をともなう部分から言葉の種々なる教誡を示すことが、天の大太鼓が法の四種の律儀を示す如くであって、しかも大太鼓はそれぞれの方向だけであるが、一切に遍満することで利益をなすのではないが、仏は所化の一切の世間に遍満して利益をなしているのもそれと似ておらず、特に勝れたものである。そのように一切の世間界に遍満する部分から智と悲により所化を成熟させることが、大雲が一切に遍満することで収穫物を成熟させることに似て、しかも雲は無意味な種子を捨てることはないが、仏は無意味な食欲などの煩惱の種子を捨てるので、それに似ておらず特に勝れたものである。そのように意味のない煩惱の種子を捨てる部分から無限の変化を示すことが、大梵天の変化が妙欲への執着を捨てるようなものであって、しかも梵天は一度だけ利益をなすが永遠に成熟させるのではなく、仏は永遠に中断せずに所化の相続を成熟させるのでそれに似ておらず特に勝れたものである。そのように永遠に所化の収穫物を成熟させる部分から知恵の無限の光線広げることが、太陽の色の光線により収穫物を永遠に成熟させるようなものであって、しかも太陽はしばしば顕現するが、昼夜永遠に闇を制圧するのではなく、仏は永遠に中断せずに無知の闇を制圧するのでそれに似てもおらず特に勝れたものである。そのように永遠に闇を制圧する部分から心の秘密の無分別智の光明を放つことが、大如意宝珠の光明により昼夜永遠に闇を取除くことに似ており、しかも宝石は龍などの畜生にも存在することで生じることは得難くないが、仏が福分をともなわない者に生じることは得難いのでそれに似てもおらず特に勝れたものである。そのように生じることが得難い部分から言葉の秘密によりよい解説を種々示すことが、こだまは内外において真実として成立しないので得難いようなものであって、しかもこだまは客塵に縁に依存してから生じるものであるが、仏は自ら生じる無為なので縁に依存してから生じるものではないのでそれに似てもおらず特に勝れたものである。そのように縁から生じるものでなく、明らかに無為の部分から身体秘密の無限の変化をすることが、虚空は種々に顕現しても無為に似ており、しかも虚空は善の基盤や所依とはならず、仏は白善法の基盤や所依となるのでそれに似てもおらず特に勝れたものである。そのように世間と出世間の有情のそれらの円満が残らずに存在する所依や基盤となるので地の大きな輪により一切の所依を

なすものに似ている。それもこのように出世間の基盤である。完全な仏の大菩提を得ることに依ってから出世間に行く道の三乗などの正法が生じるから。そのように世間の円満の基盤である。大菩提に依存してから欲界の円満の原因である十善業道と、色界の円満の原因である四禪と無量と、無色の円満の原因である無色の等至も生じるから」と言われる。[4. 93-98]

『大乘最上秘論』の宝の種姓を区別してから「如来の所作の位と言われる第四章」の解説をした。

## 第5章 利益品

3. 2. 2. 3 今度はそのように説かれたそれらの四つの場所をさらに信解するものが大きな利益を得る在り方が解説されるべきである。最高の賞讃の在り方により説いたものと、それ自身を異門により解説したものとである。

3. 2. 2. 3. 1 説かれたものにも、四つの場所が考察し難い在り方と、それを考察する利益を得る在り方とである。

3. 2. 2. 3. 1. 1 そのうち考察し難い在り方は、「仏界たる自性により清浄で客塵の垢をともなう位の如来蔵と、それ自身客塵の垢によっても清浄な位の仏の大菩提を得ることと、大菩提を区別なくともなう仏法の力などの特別な功德と、功德を得る効力により仏の所作が自然に成立し中断せずに成立する所作とであって、三宝を成立させ随順する金剛の四座の真実で如実な客塵のほとんどの垢により大菩提に住する清浄なる衆生も想像しないのであれば、凡夫の異生と声聞と独覚はなおさらのことであって、前に説いたように不可思議であるから。ではそれらは如何なる行境であるのか考えるならば、解説直後のこれらの金剛の四座の真実の通りのものが一切衆生の導師である完全な仏の知恵のみの行境となったものである」と言われる。しかも「如来に対する信により信解を作意する在り方により考察されている」とすでに解説している。[5. 1]

3. 2. 2. 3. 1. 2 利益を得る在り方に二つ。方便の善が他よりも特別に勝れた在り方と、智慧が最高になることを得る在り方により理由を解説したものとである。

3. 2. 2. 3. 1. 2. 1 特に勝れた在り方に二つのうち、

3. 2. 2. 3. 1. 2. 1. 1 簡略に説いたものは、「智慧をもつ菩薩で勝者の完全なる仏のみの知恵の行境に成立する目的のこれらの四種の場所をさらに信解する者たちは、力などの仏の無量の功德の集まりの器になるものである。大乘の種姓に目覚めてから辺際に至る結果を速やかに得るからである。そのように普通の者たちが不可思議なる功德の集まりをともなうこれらの四種の場所を明らかに喜び、さらに信解する利益はとても多いので、それと関係しないすべての衆生の布施から生じたものなどの福德の究極の集まりを制圧するであろう」と言われる。[5. 2]

3. 2. 2. 3. 1. 2. 1. 2 詳細な解説に三つのうち、

3. 2. 2. 3. 1. 2. 1. 2. 1 布施より特に勝れた在り方は、「ある善男子や善女人で特になす無上の大菩提を求める想により善妙なる事物の金から成立した広大な浄土に無量の宝石を広げ満たす者が、無数の仏の無限の浄土の極微の数と同じだけ毎日のように中断せずに最高の対象となる法王の諸仏世尊に常に奉獻してから福德をととても多く広げることになるが、それによっても智慧をとともなう他のある人が甚深なるこれらの四種の場所からはじめて、意味の考察はなおさらのこと必要で、ましてや言葉だけを聞いて、聞いてからも退くことなく固執せずに明らかに信用する在り方によりさらに信解するようになれば、信解をとともなうこれを解説したばかりの布施から生じたその広大な善によっても福德をととても多く広げることを得るであろう」と言われる。[5. 3]

3. 2. 2. 3. 1. 2. 1. 2. 2 戒より特に勝れた在り方は、「ある智慧をもつ善男子や善女人が特になす無上で完全なる大菩提を得ることを望む想により多劫にわたる長い間、本性の身と口と意による修習に依存してから、努力なしに自分の本性により罪過の行いを捨てる戒を過失の垢がなしに守ってから福德をととても多く広げようになっても、それによっても智慧をとともなう他のある人が甚深なるこれらの四種の場所からはじめて、意味の考察はなおさらのこと必要で、ましてや言葉だけを聞いて、聞いてからも退くことなく固執せずに明らかに信用する在り方によりさらに信解するようになれば、信解をとともなうこれを解説したばかりの戒から生じたその広大な善より福德をととても多く広げることを得るであろう」と言われる。[5. 4]

3. 2. 2. 3. 1. 2. 1. 2. 3 修習より特に勝れた在り方は、「ある善男子や善女人がこの世間において捨てるべき欲と色と無色の三有の煩惱の火の軍勢に似たものを取除き制圧するために自分の禪定の本性が天の四禪と梵住の四無量などを完成させ、特勝により彼岸に至る者が結果を完成させる不退の大菩提の位を得る方便を修習してから福德をととても多く広げようになっても、それによっても智慧をとともなう他のある人が甚深なるこれらの四種の場所からはじめて、意味の考察はなおさらのこと必要で、ましてや言葉だけを聞いて、聞いてからも退くことなく固執せずに明らかに信用する在り方によりさらに信解するようになれば、信解をとともなうこれを解説したばかりの禪定の修習から生じたその広大な善より福德をととても多く広げることを得るであろう」と言われる。[5. 5]

3. 2. 2. 3. 1. 2. 2 理由を説いたものは、「そのようならば布施から生じたものと戒から生じたものと修習から生じたもののそれらの広大な福德からも、これらの場所を聞いてから生じる知恵が最高である理由は何故かと考えるならば、このように財物の広大な布施をなしてから異熟果の円満な受容が成立するだけであり、戒によってもまず天上の円満なる身体だけを成立させ、禪定の修習により三界の煩惱のみを捨てるのであり、「自性清浄なる界が客塵の垢を離れてから菩提の功德の所作をとともなうことを得るであろう」と言うことを考察するこのような知恵に

依ってから、煩惱障と所知障の習気をとまなうものを残らずすべて捨てるので、それ故に意味の本性をよく理解するこの知恵自身は布施などの福德の集まりより最高のものである。その特別な知恵の原因もこれらの四種の意味の場所を退くことなく聞くことであるからである」と言われる。[5. 6]

3. 2. 2. 3. 2 それ自身を異門により解説したものに、辺際を得る利益と、道に入る利益とである。

3. 2. 2. 3. 2. 1 そのうち辺際を得る利益は、「如来蔵が始めから一切に遍満して存在する自性清浄なる界と、その基盤界自身が客塵の垢を離れてからすべての住処を完全になる大菩提と、その菩提を区別せずにとまなう力などの功德と、それらの功德に依ってから他の利益をなすことを成立させる所作であって、勝者の一切智は智の知恵の行境となる甚深なる意義の四種の場所を前に述べたようなこれらにおいて智慧をそなえたそれらの菩薩が真如を一切に遍満して存在するものと明らかに信頼する信と、それが垢を離れてから菩提を得ることができるものと願う信と、その菩薩は二種の義の辺際に至る功德をとまなう存在するものという浄信と、三種の信をとまなう門からさらなる信解により清浄なる菩提行にとても努力して入るから、速やかに究極の結果である如来の無上の位を得る時機をとまなうであろう」と言われる。[5. 7-8]

3. 2. 2. 3. 2. 2 道に入る利益に二つ。想の菩提の最高に心を起こすことが生じる利益と、修行の六波羅蜜に入る利益とである。

3. 2. 2. 3. 2. 2. 1 そのうち発心が生じる利益は、「普通の者が『不可思議な甚深なる境の意義の四種の場所自身から始めて、自性清浄なる界は一切衆生に遍満して存在するものであり、その客塵の垢を取除いてからすべての場所となる大菩提は自分のような者も得ることができるものである』と言う三種の信をとまなう門からさらに特別な信解が生じるので、正法を求めめる欲と、善の方向を明らかに広げる精進と、教誡の対象を忘れない念と、考察される対象に心を集中する禪定と、所知の法を正しく区別する智慧など不可思議な功德の器となる利他を完成する菩提を得ることを望むことを等しくともなう発心は、四種の場所を考察するそれらの菩薩に常時に近くに存在するであろう」と言われる。[5. 9-10]

3. 2. 2. 3. 2. 2. 2 波羅蜜を成立させる利益は、「前に解説したその菩提心は常時に近くに存在するので勝者の子たちは無上の菩提から退くことなく、その特別な想をもつ者が動機づけてから修行である福德の集まりにより集められた最初の五種の波羅蜜も完成し完全なものとなる。それも衆生に対して利益をなす布施などの福德の資糧となった最初の五波羅蜜であるものに作者と行為となされるものとの三種の輪として考察がないのでそれらの波羅蜜は完成し、完全なものになることが布施などのその対立する方向の物惜しみなどの障害を捨てるものであるから」と言われる。[5. 11-12]

それらも資糧を三種にまとめることは、「布施から生じた福德をなす事物が布施波羅蜜で、

戒から生じた福德をなすその事物も戒波羅蜜で、忍と禪の波羅蜜のこれら二種は修習から生じた福德をなす事物であり、それらを広げる精進は三種にもすべて行くものなので、すべてをまとめれば、福德をなす事物を三種と説いたものに相応するものである」と言われる。[5. 13]

相応しない二種の障害を把握することが、「布施者と布施をなす対象と布施などの三輪として考察であるものは、五波羅蜜を完成することを妨げる所知障であると認められ、物惜しみと貪欲と怒りと怠惰と散乱などの考察であるものは完全にすることを妨げる煩惱障であると認められるので、それらは捨てられるべきである」と言われる。[5. 14]

対治により最高の智慧を得る在り方は、「このような意味の場所をよく考察するために智慧より他にこれらの二障を根本から捨てる原因は他にない。智慧を離れた布施などは障害の出現を制圧することのみできても、種子を根本から捨てることはできず、究極の智慧により二障の習気をとまなう種子を根本から捨てることができるから。福德の資糧によりまとめられた五波羅蜜より知恵の資糧によりまとめられた智慧は最高なものであり、智慧をそのように広げる基盤は、四種の意義の場所をこのように示す教説の意趣の解説をとまなう在り方のように聞くものなので、それ故に布施と戒と修習から生じたとても多くの福德よりも甚深なる法をこのように聞く智慧が最高のものである」と言われる。[5. 15]

3. 3 今度は円満な完成の所作が解説されるべきである。解説される意味を詳しく解説したものと、説明する在り方によりまとめて説いたものとである。

3. 3. 1 詳しく解説したものに三つ。論書がどのように著わされたのかという在り方と、法を損なうものを捨てる在り方と、著わされた福德を賞讃する在り方とである。

3. 3. 1. 1 著わされた在り方に五つのうち、

3. 3. 1. 1. 1 何に依存してから解説するのかは、「上に説いたその在り方のように七種の金剛句を解説しても、自分で直し、唐突になされるものではないが、『菩薩陀羅尼自在王所問經』と『如来藏經』と『勝鬘經』と『不增不减經』と『如来莊嚴智慧光明一切仏境界經』などが了義の最高を示すので信用する場となる清浄なる聖教と、時機における所作をなす論理と、見られる論理と、同位を成立させる論理とに依って、究極の甚深なる法性の論理に依ってからよく解説するものである」と言われる。[5. 16ab]

3. 3. 1. 1. 2 何のためかは、「自分の利益からはじめて、著者は『自分自身法界のみを捨てるべき微塵の障害によっても浄化してから究極の涅槃を得るためと、利他から始めて大きな福分をもつ所化で最も甚深なるこのような意味を奪うことのない門から信解の智慧をもち、それから福德の集まりから最高なものである円満なる善をとまなうものを得る』と考えるそれらの知者がとく解説する歓喜を示すことにより続いて把握するために、この論書を解説している」と言われる。[5. 16bcd]

3. 3. 1. 1. 3 どのように説明するのかという在り方を説いたものは、「喩例は例えば灯火の光線

と、電光の光線と、宝石の光線と、太陽の光線と、月の光線<sup>12</sup>の明りに依存してから眼をもつ人たちは境に色を見るように、その意味のように諸法の自相と共相の広大な意味を知るそれぞれの意味を正しく理解し、名称の一切の異門を妨げなく知るそれぞれの法を正しく理解し、一切衆生の一切の言葉を妨げなく知るそれぞれの語義を正しく理解し、法の正しい区別をすべて妨げなく知るそれぞれの~~弁才~~を正しく理解する光線を放つムニの完全なる仏の顕現に依存してから智慧の眼により甚深なる真実を見て、本書自身が明らかになしている」と言われる。[5. 17]

3. 3. 1. 1. 4 何らかの解説される性質は、「正法の何れかの甚深で広大な述べられるべきものの大義を正しくもつことを述べる言葉の無垢なる語の法に相応して、捨てられるべき三界の一切の雑染を捨てる言葉となるので対治を寂滅する究極の涅槃の利益を示し、得ることをなすそれが大仙の完全なる仏の清浄なる教説であるので決定されるものであるが、それらの四種の意味を退くことは正しい教説とは異なる誤りを説いたものなので入るべきものではない」と言われる。[5. 18]

3. 3. 1. 1. 5 原因に従うものを尊敬して受ける在り方は、「教説の意趣の注釈の解説されるべき特殊性は勝者の完全な仏が示すものだけにより示し、自分が直すべきものではなく、解説者の特殊性は法と意味をよく知り、尊敬などを退く動揺のない意をもつ者がよく解説することによる結果の特殊性は無上の涅槃<sup>13</sup>を得るために方便のその特殊性の道を示すことに従っており、四種の功德をもつその論書も大仙の完全なる仏のお言葉の通りに信の頂上により受けるべきものである」と言われる。[5. 19]

3. 3. 1. 2 法を損なうものを捨てる在り方に三つ。浄化の方便を認識して依存することを教えたものと、損害の原因を把握して捨てる教えと、甚深なる法を損なう結果を捨てる在り方とである。

3. 3. 1. 2. 1 浄化の方便に依存する在り方のうち、

3. 3. 1. 2. 1. 1 自分の仕事を捨てる在り方は、「何故ならば勝者の完全なる仏自身よりも偉大な賢者の人は誰もこの世間界に存在しない。あらん限りの所知のすべての意味とあるがままの最高の真実を正しい在り方の通りに退くことなくすべての相を目の当たりに知る知恵自身により知るが、仏とは異なるものにより知ることはないのでそれ故に大仙の勝者自身によっても未了義と了義として設定される經典であるものについて未了義を了義と、了義を未了義と自分で直すことでかき混ぜず、誤って解説すべきではない。もしなしたならば、ムニの完全なる仏の正法の在り方を滅することになるからであり、それも正法を損なうことになり、法を捨てる大きな罪過になる」と言われる。[5. 20]

3. 3. 1. 2. 1. 2 主張の執着を捨てる在り方は、「煩惱である無明などにより心が愚かな本質をもつことになる悪い人は仏などの聖なる人を誹謗して、彼らによりよく説かれた正法を非難する

などの罪過となるものはすべて自分の極端に悪い成就を最高と執着する見解によりなしており、それからも種々なる苦により貧困になるそれ故に方向に執着する悪見の垢をもつこととなるその煩惱に賢者の智慧は決して結合しない。もし結合したならば、正しい見解と行に対する智慧になることに相応しくない罪過が存在するから。例えば清浄で無垢なる衣は染料により色は変化するが、脂肪による衣のその有垢なる衣はその如くではないように」と言われる。[5. 21]

3. 3. 1. 2. 2 損害の原因を捨てる在り方は、「そのように大乘の法の辺際の心髓である了義が最も甚深で広大な利益をともしなうならば、ある者は信解せずに捨てることになる何れかを考えることに対して、「それは法の過失ではなく、人の過失である」と示す。それもある者は甚深なる意味を考察する智慧が小さく、智慧がとても劣っているので正法を捨てるそのように合わせて、ある者は成長する種姓に目覚めないことで白善法に対する信解を離れているからであり、ある者は功德ではないものを備えているのに自分は功德を備えていると言う思いを広げる誤った我慢に依存しているからであり、ある者は前世において正法が乏しくなる重い業障を近くに集めることで正しい意味を妨げる主体をもつものであるからであり、ある者は未了義の教説を一切法の真実の了義と顛倒して把握しているからであり、ある者は食事と衣服と財産などを欲する功德の獲得にさらに執着し貪著するからであり、ある者は減する資糧に対する見などの悪見に最も執着することによるからであり、ある者は甚深で広大な正法を誹謗して捨てる悪友に長い間依存してそれに関するものになっているからであり、ある者は大乘の正法を把握する善友たる正しい特徴をもつ者も長い間遠ざかっているからであり、ある者は正しい法と人を信用しないで顛倒を喜ぶことで信解が劣っているので、如来である阿羅漢の正法を捨て、特に甚深なる真実を示すものを捨てているけれども、そのような場合も自分自身が衰える原因なので賢者はそのようになすべきではない」と言われる。[5. 22]

3. 3. 1. 2. 3 法を損なう結果を捨てる在り方に二つのうち、

3. 3. 1. 2. 3. 1 悪趣を捨てる在り方は、「例えば最も甚深なる正法から損なわれることを畏れるままに取捨に巧みな正しい人が世間において畏れずに名声の火により焼かれることと、耐えられない毒蛇により食べられることと、殺害者が殺すことと、雷が貫通することに対しても畏れるべきではなく、それよりも法を損なうことを畏れるので捨てられるべきである。何故ならば火に焼かれ、蛇に食べられ、敵に殺され、金剛の火の雷に貫かれてから今生の命を離れることだけをなすことはできるが、それらから悪趣の阿鼻地獄の有情がとても畏れて行くようにはならず、正法を捨ててからは阿鼻地獄を領受するようになるからである」と言われる。[5. 23]

3. 3. 1. 2. 3. 2 輪廻を捨てる在り方は、「およそ悪い人は何度も悪友に頼り、それに関するものになるので、帰依処である無上の完全なる仏に対しても殺すことを望む大きな悪心をもつようになることで身体の血を輩出させ、それぞれの世間で確実な人の師である父母の恩恵をともし

う者たちを殺し、一切の人により共通に尊敬するに相応しい阿羅漢も殺すというなすべきではないことをなし、最高の集まりである僧を破ってからその破る人も一切法の甚深なる真実のすべての相の最高をそなえた空性と、対象のない大悲を確実に思い、一点を修習すれば、速やかに無間などのその大きな業障から解脱してから大菩提を得るであろうが、ある人で意が大乗の辺際の心髄である了義の法を嫌い、捨てる彼に解脱の無上菩提を得ることみることがどこにあるか。その道を修習する福分をともしなわれないから」と言われる。[5. 24]

3. 3. 1. 3 福德を賞讃する在り方は、「仏と法と僧で、得られるべき結果の三宝の意味と、それらを成立させる原因の自性清浄なる界の如来蔵の意味と、それ自身は客塵の垢がなくとても清浄な位の大菩提の意味と、そこに存在するものを離れることと成熟させる結果によりまとめた功德の意味と、その効力により利他をよく成立させる所作の意味とで、述べられる意味の七種金剛句を退かない在り方を如実に解説してから、解説者である自分で清浄なる善根を得る者が輪廻に住するこれらの有情が一切の時機の結果である仏の輪を周りに生じてから無限の光線の集まりがある仙人たる無量の寿命と知恵の完全なる仏のお姿を目の当たりに見て、仏を見てからも彼から正法を聞き、領受してから塵がなく無垢なる法眼の見道などを得てから甚深なる法を畏れない清浄なる忍耐を起こして、辺際の結果である無上で完全なる最高の大菩提を速やかに得なさい」と言われる。[5. 25]

3. 3. 2 説明する在り方によりまとめて説いたものは、何らかのものに依ってから解説したものは、「そのように信用できる聖教と論理に依ってから」と言うことにより示されており、理由や目的が何の為であるか解説したものは、「自分だけのためと、信解の円満な善をもつそれらの智者が続いて把握するために解説する」と言うことにより示されており、在り方がどのようなかを解説したものは「例えば灯火と稲妻と宝石と太陽と月」などと言うことにより示されている。何らかの意味が解説される本質は、「何らかの意味をもつもの」などと言うことにより示されており、その解説されるべきものを考察する原因に従って解説するものは、「勝者が説かれたものだけにより」などと説くので論書をどのように著すのかの在り方は「そのように」などの四偈により詳しく説かれている。「何故ならば勝者より偉大な賢者」などの二偈により自分自身を浄化する方法として法を捨てる障害を習気として説いている。「智慧が劣っているので」などの一偈により法を捨てる業を集めれば自分自身を損なう原因なので捨てる教誡が説かれており、それに続いてから「どのように甚深なる法を損なうのか」などの二偈により甚深なる法を損なう結果の悪い時機に行くことに落ちることと究極の解脱を獲得しない二つの捨てることが正しく説かれている。時機としての清浄なる浄土の仏の輪廻の輪に生まれてから法性を目の当たりに考察して、甚深なる意味を畏れずに耐えることを得ることと、究極の無上の大菩提を得る法を回向することを述べる門からまとめれば正法に入ることにより結果である時機と究極の意味の二種の円満を成立させることが「宝と清浄界」などと言う最後のこの一偈によ

りよく説かれている。[5. 26-28]

『大乘最上秘論』の宝の種姓を区別してから「利益の位と言われる第五章」の解説をした。

そのようであれば、「勝者で偉大な将来仏の吉祥をもつマイトレーヤ尊者が著された『大乘最上秘論』と、偉大な規範師聖アサンガが著された注釈書に相応して解説したものが成立し、究極を完成した」とも言われる。

4 その意味を上手く翻訳した在り方が、「吉祥をそなえた無比の都城の偉大な賢者でバラモンの金剛宝の甥である偉大な学者のサツジャナと翻訳官のシャーキャの比丘のロデン・シェーラブによりその無比の都城において翻訳された。

考察しないことと、誤った考察と、疑惑の一切の闇を引き出してから取除くこの上手い解説は太陽の光線である。善によりすべての有情の闇を取除きなさい。

蔵を保持するベルデン・ツンドゥー<sup>14</sup>と、ブンツォグ・ペル<sup>15</sup>の二人により請願された御前で、吉祥なるチョナンの山寺において、国土の偏向がなく罔もなく四依により合わせられる。説法と衆生利益が廣大に成立させなさい。幸あれ。

一つ尋ねる。チョナンで説いた大徳ジェツン・ガワン・ユンテンサンポ<sup>16</sup>の説いたものは一切の方向広がり、広く長い間とどまり、心の一切の意趣は努力なく自然に成立し、その説を偵察する人の寿命は堅固で、有情の利益を十方に広げる原因となりなさい。勝ち誇れ。

#### 参考文献 (承前)

##### 望月海慧

2008c 『Dol po paの『宝性論釈善説陽光論』について (Ⅱ)』『身延山大学仏教学部紀要』9, pp. 65-119.

- 1 全体の内容については前稿にそのシノプシスを示しているので、そちらを参照していただきたい。また各章の分析については、Mochizuki 2009を参照のこと。
- 2 本注釈書の構成の特徴については、Mochizuki 2009を参照。
- 3 これについては、Hopkins 2006などが有益な資料を提供している。
- 4 Dol po pa の三転法輪については、望月2006を参照。
- 5 RGVのTib. は「示す (ston)」に対して、Skt. は「得る (thob)」とある。cf. 中村 1967, p. 178, n. 1.
- 6 大岩昭之「チベット語の語彙によるチベット建築の考察 (その1)」『日本西蔵学会会報』51, 2005, pp. 102-107.
- 7 mos pa. RGVは「信 (dad pa)」とある。
- 8 nyon mongs dag 'gyur. ここではdagを浄化と読んでいますが、RGVではそうではない。
- 9 me rnams 'joms tshul. 先程の項目分類ではme rnams shi ba'i chos mthun sbyar.

- 10 yum sgyu ma chen mo.
- 11 'dangs. RGV ldongs.
- 12 RGVは太陽と月の順序が逆である。
- 13 RGVは「解脱 (thar)」とある。
- 14 dPal ldan brtson 'grus.
- 15 Phun tshogs dpal (1304-1377).
- 16 nGag dbang yon tan bzan po.

(本研究は平成21年度科学研究費補助金「基盤研究 (C)」による研究成果の一部である)

(キーワード) Dol po pa, Shes rab rgyal mtshan, Jo nang pa, Maitreya, *Ratnagotravibhāga*